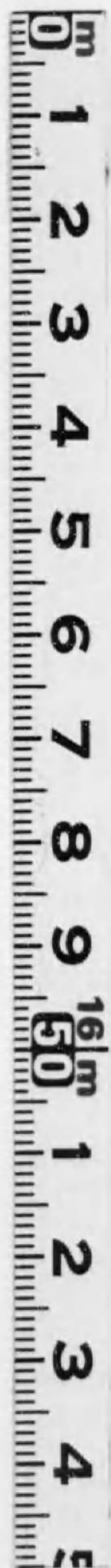


501
127



始



36.4. 6

50/-127



風流畫法

寶子著

大正
10 8.20
內交

序

「風流懺法」は明治四十年四月のホトトギスに載せた作で、私の寫生文が小説の色彩を帯びた最初のものである。

「續風流懺法」は又た四十一年五月のホトトギスに載せたものである。此冊子に收めるに當つて大分割減した。

「風流懺法後日譚」は大正八年一月から大正九年六月に至るホトトギスに飛びくりに載せたものである。是も此冊子に纏めるに當つて多少の修正を加へた。

「一念三千」といふ言葉は私が叡山の坊さんと話した時によく耳に

した言葉である。其言葉を二つに分つたのが「一念」と「三千歳」後に「お三千」となった。

嘗て「風流懺法」「續風流懺法」を書いた京の宿に在つて此冊子を輯め此序文を認める。

大正九年六月二十二日。某々等と叡山に登る前夜

虚子

風流懺法……………一

續風流懺法……………三九

風流懺法後日譚……………六三

風流懺法

横 河

今朝阪東君が出立するのを送られて和尚サンもあまり行けぬ口に一杯過ごされた。阪東君が出立したあとで和尚サンは暫く火燵櫓に頸を載せて居られたが、其内、

「一寸一睡りしますわ。」とろりと横になられた。

叡山みづのの横河中堂ちゆうどうの政所せいじよに余はもう四五日滞在して居る。偶々京都に來た阪東君は昨日余を尋ねて登山して昨夜は和尚サンと三人枕を並べて寝たが、今朝東塔西塔を一見して白河くわがは口ぐちに下つて京に歸る筈で出立した。余も明日は下山して阪東君と一兩日京都で同遊することに約束したのである。

横河は叡山の三塔のうちでも一番奥まつてゐるので淋しい事も亦格別だ。二三町離れた處にある大師堂の方には日によると參詣人もぼつ／＼あるが、中堂の方は年中一人の參拜

者もないといつてよい。大きな建物が杉を壓して立つて居る。四方の扉は皆締切つてあるので中は眞暗だ。只正面に一尺角許りの穴が開いて居るので其處から中を覗くと、其眞暗な中に常燈明が淋しくともつて居る。政所は其中堂を十間許り離れた所に別棟になつて建つて居る。其處に和尚サンが下男も置かず一人で自炊して居られる。余も自炊の手傳ひをしながら四五日滞在して居るのである。

和尚サンは布團から丸い頭だけ出して海老のやうになつて寝て居られる。もうぐうぐうと眠られた様子だ。この和尚サンのお勤めは毎日一時間半づつ中堂で看經かんぎんをせられることだ。其外に何も用事は無い。其看經も時は一定してゐない。朝でもよい晝でもよい晩でもよい。要するに一時間半さへ勤められればよいのだ。だから眠い時は朝からでも眠られる。淋しい境涯だが又氣樂な境涯だ。

余は和尚サンの部屋を出て玄關の並びの自分の部屋に戻る。机つくえに靠かかれてちつと耳をすま

す。静かだ。今は嵐の音も聞えぬ。鳥の聲もせぬ。何だか静かさが極點まで達して、もの凄いやうな氣もする。程なくポツリ／＼と雨垂れらしい音が聞える。驚いて障子を開けて見るといつの間にか雨が降つて居る。軒の小坊主が光つては落ち光つては落ちて居る。寒い。障子をたてる。

それから二時間程余は用事をしてゐて何事も忘れてゐた。ふと氣がつくと和尚サンはまだ寝て居られる。雨はまだ静かに降つて居る。臺所に物音が聞えるやうだ。不思議に思つて行つて見ると、暗い臺所に白い衣を着た小僧サンが一人居る。流しの前に立つて何物か洗つて居る様だ。よく見ると今朝よこれた儘の茶碗や皿を置いて置いたのを洗つて呉れてゐる様だ。小僧サンは余の方を向いてニツコリ笑つたが辭儀もしない。

「君は何處の小僧サン。」と余が聞くと、

「大師堂。」と大きな聲で答へて、

「どうして昨日湯に入りに来なかつたの。」と友達のやうな口をきく。
「風邪をひいてゐたからサ。」

「折角僕がわかしてやつたのにナア。」

「君がわかしてくれたのか、それはすまなかつた。此次は這入るヨ。」

「僕はあすうちへ歸るのだヨ。」

「君のうちはどこ。」

「僕のうちは東京。だけれど京都に伯母サンがあるの。あすは伯母さんのうちへ行くの。」

「伯母サンのうちは京都のどこ。」

「祇園町。」

「祇園町とは一寸意外であつた。」

「祇園町といふのは何處。」と試に聞いて見る。

「祇園町を知らないのか。馬鹿だナア。」と小僧サンは甚だ輕蔑した調子で、

「君はいつまで此處に居るの。」

「僕か、僕も明日京都へ行く積りなの。いゝヨこゝに拭巾があるから拭くのは僕が拭くヨ。」

「まア貸したまへ僕が拭いてやらア。明日京都へ行くのか。此次は這入るナンテ、今度いつ湯がわくと思つてゐるのだ。間拔だなア、五日目くでなけりやわかないのだヨ。」

機鋒鋭くして當るべからずだ。

「さうか、それぢや大師堂のお湯にはもう這入れないね。困つたナア。」

「困らなくつたつていゝや。アンナ汚ない湯に這入らなくつたつて京都にいくらでもいゝ湯があらア。君、湯は東京よりも京都の方がいゝヨ。京極にいゝ湯があるぜ、蒸氣でわかすのだヨ。」

「君はいつ小僧さんになつたんだ。」

「二月。」

「二月つて今年の二月かい。」

「ウン。」

「東京にはいつまで居たの。」

「去年まで。尋常を卒業するとコチラへ来たの。君、櫻田小学校知つてゐるかい。僕あそこに行つたんだヨ。山崎や戒田は今年高等二年になるんだつて威張つてらア。このあひだ手紙をよこしたヨ。字ナンカ矢張り下手だア。ネエ君、いくら威張つたつて字の下手なのは見つとも無いや。」

小僧サンは茶碗や皿を戸棚に片付て臺所を掃除して、ズン／＼余の部屋に這入つて来る。「君勉強してゐるのかい。君全體何しに来たの。遊びに来たのかい。……馬鹿だナア、コ

ンナもの書いてらア。全體何の畫だい。下手だナア。僕の方がよつぽどうまいや。」と火鉢の向うに坐つて机の上に置いたノートブックを開けて痛罵を試みはじめた。

暗い臺所から明るい部屋に来て見ると小僧さんはなか／＼美少年だ。年は十二三で、色白で、目が大きくつて、口元が締まつて居る。

「よう君、何を書いたんだい。密壇の畫だつて。こんな密壇があるものか。馬鹿だナア。禮盤がこんなに小さくつて、脇机わきぐきがこんなに大きくつてどうするんだい。」

元來畫心の無い余が文字代りに急いで書き取つた圖を散々に攻撃する。

「『朝念觀世音、暮念觀世音、念々ねんねん從心起、念々ねんねん不離心』……十句觀音經など書いてらア、間抜けだなア。……『こんな處へ落ちたら死にますエ』……『強氣がうきな事したもんどすえ』……こんな事君書いてるのかい。こんな事書いてどうするんだい。本當に馬鹿だなア。」と余の顔を見る。大きな目に冷笑の光を灑あびらせて居る。

「全體君は何だい。何を仕事にしてゐるんだい。妙な事を書き留めとくんだなア。」と獨り言のやうにいひながら、紙の間に挿んであつた鉛筆を取つて余の顔を寫生し始める。一寸空目そらめを使つては書き一寸空目を使つては書く。

「駄目だなア、君は動くから駄目だ。こゝの和尚サンを書いて見ようか。こゝの和尚サンは大きな頭をしてゐるだらう、こんな頭だぜ。それからねえ、耳がこんなに……まるで蝙蝠のやうだぜ。僕は和尚サンと向き合つてると、いつでも頭と耳ばかり見てやるのだ。君、君。」とだん／＼聲を張り上げて來て、

「それからねえ君、和尚サンの耳は動くぜ。不思議だぜ。どうかしたはずみにびこびこと猫のやうに動くんだもの、僕ア不思議だと思つちやつた。」

和尚サンは「ウーン」と布團の上に白い片腕を突き出して片々の手で擦つて居られる。

「ヨセ／＼、ソナナ人の悪口をいふものぢやない。君は腕白だア。」と余は最中なかを三つや

る。

「有難う」と早速一つ頬ばる。余の飲みさして置いた茶碗の上に冷たい茶を注ぎ足して飲む。

和尚サンは、

「ア、よく寝たことや。」と欠きびをしながら起き上られる。

「一念、來てゐたか。お客様の邪魔をしてはいかぬぞ。」

「邪魔なんかするものですか。」と手帳の上に和尚サンの欠びの圖を書いて顔中口にする。さうして其口から棒をひいて、

「一念キテ イタカ、オ客サマノジヤマシテハイカヌゾ」と書いて、又耳から棒を引いて、

「コノ耳ウゴク」と書く。余は覺えず噴き出す。一念は知らぬ顔をして、

「寶珠院サンは今日午から下山くだる積りだから、さういつて呉れといひましたヨ。」と一寸和

尙サンの方を見て、すぐ今度は眼鏡を掛けた和尚サンの似顔を描く。見ると成程鼈甲縁の大きな眼鏡を掛けて和尚サンは何か書つけを見て居られる。

「けふは十二日だな。」と迂遠なことを言はれる。

「十四日ですよ。」と余は答へる。

「十四日か。もうさうなるかな。あなたが来たのがとゞ日であつたかな。」

余はもう五日間滞在して居る、それを一月程にも覺えるのに和尚サンは暢氣なことをいはれる。

「あなた落の薑好きか。納豆はどうか。」

「納豆は閉口ですが、落の薑は結構です。」

「それではあすお歸りまでに落の薑の田樂を一つ拵へて上げう、けふは雨だから困るが、兜率谷とらうたにの方に行くと落の薑が澤山ある。あすの朝天氣になつたら一念一つ取つて来てん

か。」

一念は聞かぬ風をして、

『明治二十八年十月二日生一念』と鉛筆を壓へ附けて四角な字をノートに書いて居る。

「落の薑の田樂といひますのは。」

「落の薑を串にさして味噌を附けて焼くのや。よほど香りのえゝものぢや。落の薑が嫌ひでなけりやキツと賞翫おしるやろ。」

「そりや結構でせう。兜率谷といふと恵心廟のさきの方ですね。それぢや私が取つて來ませう。」

余はこゝに來てから全く精進料理ばかりを食つて居る。それも煮豆に焼湯葉に味噌が主で、豆腐汁やはうれん草のひたし物などは坂本からの幸便に豆腐やはうれん草が届かなかけりや食ふ事が出來ん。左様もんな中に落の薑の田樂は聞いたゞけでも珍味だ。もう其香が室内

に満ちて居るやうな氣がする。

一念は余が机の上を掻き探してゐたが、

「これ、君何だい。」と安全剃刀に目を留める。

「剃刀だよ。」

「剃刀だつて。馬鹿だナア。こんな剃刀で君は髯を剃るの。うまく剃れるかい。」と頻りにひねくつて見て居る。

「一念、御邪魔なせんやうにして、少し臺所の事でも手傳つておくれ。」

「一念君は最前もう大變働いてくれました。茶碗や皿をすっかり洗つてくれました。」

「さうであつたか。それは御苦勞であつた。序に氣の毒だが、茶釜に一杯お湯をわかして呉れまいか。」

一念はだまつてまだ剃刀をいぢつて居る。

「どうやつて研ぐんだい。」

「斯うやるのサ。」と余はやつて見せる。

「馬鹿だナア。」と再び受取つて、

「君いつ剃つたの。今剃つて見たまへな、よう、剃らないのかい。馬鹿だナア。」と感心する時も不平な時も「馬鹿だナア。」といふ。

「一念お湯をわかして呉れまいか。」と和尚サンはゆつくりと又くりかへされる。

「君、和尚サンが何かいつて居られるぢやないか。」

「剃つて見ないのかい。間拔だナア。」と一念はいかにも残り惜しさうに剃刀を見返りながら臺所に立つて行つた。程なく茶釜の下を燻し始めたらしい、松葉のばちばちといふ音が聞える。

「中々才はじけた小僧サンですね。」

「どうも徒^{いた}づらで困りものだ。其代りお經もよく覚える、役にも立つ、育てやうによつたら立派なものになるやろ。……大變降るやうだな。阪東サンはお困りやろ。もう十一時か。」と和尚サンは火燧から出て背延びをせられる。大きな頭が目についてをかしい。一念は何をして居るのか只松葉のはねる音が聞えるばかりだ。和尚サンは火燧櫓をのけられる。其あとがすぐ爐になる。其處に鐵瓶を掛けて其邊の埃を拾うては爐の中にくべられる。

「お茶を入れろ。仕事の切れ目ならお出でんか。」

「頂戴しませう。」と爐の向う側に坐る。

「わしは冬でも藤枕^{フジまくら}をするので……けふはどういふ工合であつたか頭がしびれたやうだ。」と下にしてゐられた右側を掌で擦られる。見ると枕の角の痕が赤く頬に残つて居る。

「寝がへりもなさらず片側ばかり下にしてゐらしたからでせう。」

「寝がへりといふものは平素^{ふだん}からあまりしませぬて。戒律に頭北面西右脇臥^{ウデバ}といふ事がや

かましくいうてあるが、頭北面西は間取りの都合などで嚴密には行かぬにしても、僧は大抵右脇臥といふ事だけは守つてをる。殊に仰臥は非常に嫌ふので、仰向けに寝ると淫心を起こすともいふし、淫^{ひま}を驚^{おど}ぐものは仰臥すると、いふし、旁々それは必ず避くべきことになつて居る。其理由は兎に角、出家が大の字になつて寝るのはあまり見つともないものでな。と和尚サンは、きびしよの終りの一二滴を余の茶碗と御自分の茶碗とに等分に落される。鐵瓶の湯氣が眞直ぐに登つて和尚サンの顔のあたりで消える。

「和尚サンおいくつです。」

「わしかな、もう丁度や。」

「五十ですか。」

「さうや。もう來年位からは小僧か男を一人置かぬと、自身が億劫や。」

「さうでせうとも。一念サンは寶珠院サンの御秘藏ですか。」

「寶珠院は持てあまして居るのや。わしに預つてくれともいうとるのやが、わしの手にもあまりさうやて、ハ、ハ、ハ。」と最中のこはれてゐるのを掌に載せて丁寧にあたられる。爐の縁にこぼれたのを指先でおさへて口へ持つて行かれる。

「和尚サン、お湯が沸きましたよ。サヨナラ。」と一念の聲がする。

「さうか、それはお世話であつた。もう午や。茶漬など食べて行かんか。……ア、さうおし。一念々々。」と延び上るやうにして大きな聲を出される。成程和尚サンの耳は少し動く。ノートに書いた一念の畫が思ひ出されてをかしい。併し一念はもう裏口から歸つたものと見えて返事が無い。

一 力

仲居のお艶に、

「それが名高い赤前垂かね。」と聞くと、お艶は一寸氣取つて蠟燭の心を切つて、

「さうどす、これは一力ばかりに限つた事やおへんけど、斯うやつて帯に挟む工合が他樓とは違つてますのや。」といふ。阪東君が、

「一寸立つて見せ給へ。長いのかい。」ときくと、お艶はだまつて立つて、帯に挟んであるのをはづして見せる。大幅の緋の縮緬を二枚合せた廣いのが、チャンと並べた足を隠して幔幕のやうに疊の上に垂れる。廣い座敷に林のやうに立つて居る蠟燭の光りがこの赤前垂れ一つに集まる。其時向うの銀紙で張つた衝立の蔭から、今日四條の雜店で見たやうな舞妓が一人現はれる。同時に衝立の中から、

「三千歳はん上げます。」といふ聲が聞える。舞妓は余等の前に指を突いて、

「姉はん、今晚は。」とお艶に會釋する。厚化粧の頬に鬢が出来て、唇が玉蟲のやうに光る。

お艶の赤前垂の赤いのが此時もとの通り帯の間に疊まれて、極彩色の京人形が一つ疊の上
に坐つて居る。

「お前いくつ。」

「十三どす。」

「本間に可愛い兒どすやらう。私等毎日見えますけど、見る度に可愛て可愛てかなひませ
んわ。」とお艶は銀煙管に煙草をつめる。

「其帯は妙な結びやうね。」

「これどすか、かうやつて、こゝをかう取つて、こつちやに折つて、かう垂らしますのや。」
と赤いハンケチを膝の上でたがねて見せる。白い指が其ハンケチにからまつて美しい。

「何といふの其名は。」

「だらり。」

「鬘まげの名は。」

「京風。」

「櫛は。」

「これどすか」と白い手を前髪の後ろにやつて、

「花櫛。これは前髪くゝり。あなた何書いとわやすの。」と余のノートを覗き込む。」

「三千歳はん、今日虚空蔵様へお詣りやしたか。」

「ハ。」

「何というてお拜みた。」

「阿呆どすさかいに智慧おくれやす、ちうて。」

銀紙の衝立の蔭から又人形が一つ出る。

「松勇はんあげます。」

「姉はん、今晚は。」と三千歳に並んで坐つて、

「今日お詣りやしたか。」と三千歳の手を取つて自分の膝の上に置く。

「ハー。」

「歸りしなにあとお向きやへなんだか。」

「向かしまへなんだ。」と三千歳は髷の上を両手で壓へる。

「面白さうなお話ね。」と聞くと、

「虚空藏様に詣つて戻り道にあと向くと智慧かへしますてやわ。あの染菊はんは、つい忘れてあと向かはつて、歸らはつてから阿呆にならなはつたて。おゝいや。」とお艶がいふ。

「いやらし。」と三千歳と松勇は同じやうに眉をよせて、同じやうに背中の帯に手をやる。

一つの絲で二つ人形が一所に動いたのかと思はれる。ちりけ元から垂れた帯は松勇のが殊に長。疊の上に流れて居る。

「其帯は何といふ結びやう。」と又松勇に聞いて見る。

「これどすか、だらり。」

「髷は。」

「京風。」と同じ事をいふ。

銀紙の衝立の蔭から今度は人形が二つ出る。

「喜千福はんあげます。」

「玉喜久はんあげます。」

「姉はんおほきに。」

「姉はんおほきに。」と二人並んで燭臺の向うに坐る。此方の二人が鏡にうつゝたやうによく似て居る。

「二人の帯は。」と又聞くと、

「これぞすか、だらり。」と喜千福が玉喜久を見る。

「髻は。」

「京風。」と玉喜久が喜千福を見る。

「同じこと、聞きやすのどすな。」と三千歳は笑つて又ノートを覗き込む。

「喜千福はん、あんたの顔見て書いとわやすわ。妙な顔にお書きやしたえ。」と三千歳がふ。皆が笑つて喜千福の顔を見る。

「お、晴れがまし。」と喜千福は長い袂の中程で顔をかくして、

「姉はん、藝子はんは。」

「お花はん貰ひにやつたの。もう來やはるやろ。あんた都踊りにお出るのん。」

「ハー。」

「踊りばつかり？」

「踊りと鼓。」

「三千歳はんは。」

「踊りばつかり。」

銀紙の衝立の蔭から今度は五十餘りの藝子が出る。

「お花はんあげます。」

「姉はんおほきに」とお艶に會釋して坐ると、

「姉はん。」

「姉はん。」

「姉はん。」

「姉はん。」と四つの人形が先を争つて、老妓にお辭儀をする。

子供衆が蠟燭の數を殖やす。お花が三味線を取つて「京の四季」を唄ふ。四人が袂をそ

ろへて舞ふ。四人共皆美しい。中でも三千歳が一番美しい。それがすむと今度は三千歳が一人残つて舞ふ。

『牡丹に戯れ獅子の曲』とお花が少し皺しわられてゐながらよく通るいゝ聲をふりしぼつて唄ふ。

『目前の奇特新らたなり』と爰で合の手があつて、三千歳は扇を逆手に持つてきりきりと廻る。

『暫く待たせ給へやと』とそれから調子が進んで来て、

『獅子とらでんの舞樂のみぎん』の處でバタ／＼と勇ましく拍子を踏む。余は便所に立つ。梯子段を降りる。のいつ間にやら酔うたと見えてひよろ／＼とする。後ろからお艶が、

『あぶのつせ。』といひ乍らついて来る。

『獅子の座にこそなほりけれ』といふ聲がかすかに後ろで聞える。下座敷も三所程で賑やかだ。

かだ。

手水をすませて手を洗つて居ると、

『君來てるのかい。』といふものがある。ふりかへつて見ると一念だ。

『祇園町知らないなんて嘘言つてらア。君今日下山たのかい。』となつかしさうに寄つて来る。

『君の下山た翌日に下山たのサ。こゝが伯母サンの家かい。』

『さうぢやないんだい。』

『僕の座敷に來たまへナ。』

『厭だ。』

『なぜ、叱られたら僕が詫びてやるから來たまへ。』と手を取つて連れて戻る。

『玉椿の八千代までもと契りしに(合)西國願禮サーサ御詠歌……』と松勇が踊るのをお花

は地を弾いて居る。余が一念を連れて来たのを見て、お花は唄ひながらニヤリと笑ふ。喜千福も玉喜久もニコリとする。お艶もホ、ホ、と笑ふ。よく見ると余の顔を見て笑ふのでなく、三千歳と一念の顔を見くらべて笑ふのだ。

「一念はんおいなはつたン。旦那はん知つとゐるの。」と三千歳は一念を小手招きして其傍に坐らせる。一念も大人しく其傍に坐る。

「旦那はん、あんたはんどつから其御夫婦連れといやしたの。」とお艶がいふ。

「何これが御夫婦なのかい。」と余は驚いて二人を見る。

「あたし一念はんに惚れてるのんどつせ。皆なでお笑ひやす。お笑ひたてかまへん。ナアそやおへんか一念はん。」と三千歳は可愛い口をむつと閉ぢて一座を見る。

「えらいおのろけ、かなはん。」とお花は撥で空を煽ぐ。一念は余のノートを取上げて、

「またこんな事かいてるナ。『ウーンと首』つて君何の事。『きといた』つて君何の事。」

「きとゐやしたといふ事をさういひますがな。」と三千歳は美しい顔を一念にすりつけるやうにしてノートを覗き込む。

「さつきもいろく書いとゐやした。この畫けつたいな畫やおへんか。」

「下手な畫だねえ。これ誰を書いたのかい。三千歳さんかい。」

「喜千福はんどすがナ。旦那はん喜千福はんが好きやさかいお書きやしたのどすやろ。何どす其畫は。大きな頭の坊さんや事。それも旦那はんがお書きやしたんか。さうか一念はんか。さうかそれが横河の和尚さんかア。横河の和尚さんそないに頭大きいのン。耳もそないに大きいのン。いやらしやの。『コノ耳ウゴク』ほんまに耳が動くのン。けつたいな事。松勇はん、横河の坊さんの耳が動くて。けつたいえなあ。」

「けつたいえなあ。一念はんほんまに動くのか。さうか、妙な耳えなあ。」

「一念はん。尋常卒業おしたんか。」

「したヨ。三千歳サンは。」

「しました。去年。一念はんは。」

「僕も去年。」

「さうか同じやな。一念はん優等か。」

「僕は一番だつたよ。すつかり甲だつたよ。」

「さうか、おゝえら。」

「三千歳サンは。」

「一年の時はお尻いぼから三番目やつたのが、二年からは本間に四番になつて、卒業する時もやつぱり四番どした。乙が一つあつたん。」

「何が乙だつたの。」

「體操。」

「三千歳サン、斯ういふ字知つてるか。」

「知りません、そんなむつかしい字。一念はん知つとゐるか。」

「横河首榜しやうぼう嚴院の榜の字だヨ。」

「そんな坊さんの事知りますもんか。ソナナラ一念はん斯ういふ字知つとゐるか。」

「そんな變挺へんていな字知るか。」

「な〜といふ字どすがな。」

「そんな藝者の事なんか知つてたまるかい。それなら斯ういふ字よめるかい。」

「むつかしい字えな。知りまへん。」

「蘇そ悉しつ地ぢ經ぎやうといつてね、三部經の一つだヨ。」

「そんなら一念はん斯ういふ字知つとゐるか。書いてしまふまで見んとおきや。」と長い袖でノートを隠すやうにして何やら書く。花櫛が灯に光つて美しい。

「さあお見。これ何といふ字どす。」

「馬鹿だナア。へのへのなんか書きやがつた。」

「君達は僕のノートをオモチヤにするんだナ。宜しい。それを横河の和尚サンに送つて一念は嫌サンがあつて二人でこんないたづらをしました、とさういつてやるよ。いゝかい。」

「いゝやい。間抜け。」

「一念はんの事お告げやしたらひどい目に命はせまつせ。今度お出でやしたら殺したげまつせ。」

「こはい事。旦那はん。こはいこつちやおへんか。三千歳はんに殺されたら痛い事どすやろ。」

「赤い血が出ないで白い血が出るかも知れない。」

「なんぼな。おなぶりやす。ナア一念はん二人でひどい目に命はしたげまほナア。」

「間抜けの顔を僕が書いて見ようか。そらこんな四角な顔だらう。」

「そや〜。」

「こんなに眼尻が下つてらア。」

「そや〜。」

「こんなに鼻がふくれてらア。」

「そや〜。」

「こんなに頭が尖ンがつてらア。」

「そや〜。」

「こんなに首が延びてらア。」

「そや〜。本間によう似てるわ。松勇はんお見んか。旦那はんの顔によう似てますやろ。一念はんは畫が上手えなあ。」

「まさり男は丸の傍にばかりゐると、ちとお立ちたらどうえ。今からさう浮氣おしるとお母はんは告げるえ。」

「いやな姉はん。いうとくれやししたらするのに。唯、どすか。あたし太鼓どすか。松勇はん二緒にしまほ。」

「囃子が始まる。三千歳と松勇の太鼓に喜千福と玉喜久が二挺鼓をうつ。ヤー、ハー、イヤと黄色い聲をふりしぼつて、チョンポポ、デンデコデンと鳴らす。お花と今新たに加はつた小末といふ若い藝子が地を弾く。阪東君が酔つて手拍子を打つ。其度に體が前後に揺れる。」

「小原女の踊が見たいナ。」と阪東君が醉眼を開く。お花が三味線を取り上げると、今度は小末が踊る。

「わしが在所は京の田舎の片ほとり、八瀬や小原に牛引いて(合)柴うちばんしよぎ頭に一

寸載せ(合)梯子買はんせんかいな、くるみ買はんしやんせエ(合)エ、、、(合)空が曇れば雪がちら〜と(合)それちやたまらぬ熱爛あつたでのめ、眞赤に酔へばそこらへぶつ倒れ(合)それちや色氣もこひけもないわいな(合)おこしてやんなあエ(合)エ、、、(合)』
一念も三千歳も並んで大人しく見て居る。小末といふのは十七八、髪は江戸ツ子の島田に結つて、縞飛白の着物に厚板の帯を小意氣にしめて居る。それが手拭で頬被りして小原女まはらめになつた姿は、今迄極彩色ばかりであつた中に又さつぱりと美しい。

「君食はないか。」と刺身を取つてやる。

「僕は坊主だから食はない。」

「それで君三千歳さんに惚れられたり、小末サンに見とれたりしていゝのか。」

「何いやがるンだい。」といひながら三千歳の前の皿にある林檎の切れを取つて食ふ。

「中のえゝ事。」と松勇が逃腰をしていふ。

「よろしおすやろ。」と三千歳はツンとすます。

『手を引いて、グードバイして二足三足、別れとも無い胸の内……』といふ今度は今めかしい唄をお花がうたつて玉喜夕と松勇が踊る。其内小末と喜千福も一緒に踊り出す。そこがいかん、こゝがいかんとお花が直す。

『手を引いて、グードバイして二足三足……』と同じ唄が何遍といふ事なくくりかへされる。まるでお稽古が始まつた様だ。しまひには阪東君が立つて踊り出す。不器用な踊りエ合がをかしい。お艶が笑ふ。

下から仲居のみねが、

「一念はん。伯母はんが迎へに來やりましたえ。早うお歸り。」といつても一念はだまつてゐる。

『互に見合す顔と顔』といふ處で阪東君の眼つきがをかしいというて皆がどつと笑ふ。一

念も笑ふ。

「おい一念君、伯母サンが迎へに來なすつたつていふぢやないか。叱られぬやうに早く歸りたまへ。そらお土産だ。」と今持つて來た許りの菓子を半紙に一包やる。

「叱られたつていゝやい。」とお菓子をひつたくるやうに取つて、

「もう君横河へは歸らないのかい。僕明日歸るのだヨ。」といつてお菓子を手に持つたまま歸りかける。

「一念はん、ハンケチ貸しまひよか。」と三千歳は立上つてハンケチを振る。一念は一寸振りかへつたが知らぬ風をして踊の中をかけぬけて歸つて行つた。

「京都名物のむし餅が來て藝子も舞妓も仲居も寄つてたかつて食ふ。」

「三千歳はん、一念はんが歸らはつて淋しおすやろ。咽につめん様にお上り。」

「おほきに。」

「利口な小僧だナア。三千歳サンが惚れるのも無理は無い。」

「お父^{ちち}つあんもお母^{はは}はんも無いのやてな。可哀想やおへんか。どうして横河みたいな淋しい處へ伯母はんがやりやはつたんやる。」と三千歳は沈んで居る。

横河の夜は更けにくかつたが祇園の夜は更けやすい。

「ハ——イ——。」といふ子供衆の長い返辭が樓中に響きわたつて聞える。

續風流懺法

三條大橋

余は三條橋畔の宿に泊つて居る。今日は朝からの降りて一日蟄居して欄干に靠れて橋を眺めて居る。橋の上には春雨傘が往來する。白い雨傘の中に黒い蝙蝠傘も交つて、其傘が團々と固まつて往來が詰まつてしまつたかと思はれる事もあるが、それがすぐ又散らばつて東からへ、西から東へなだれ行く。幌を掛けた車が其間を縫うて駈ける。

少し明るくなつていつの間にか雨が上つたと見ると、もう幌を下ろした車が威勢よく駈ける。其車は東京ではあまり見ぬ相乗が多い。さうして其相乗には大概目醒むるやうな服装をした人が多い。宿の女中のいふところによるとこれは皆藝子ださうな。今朝からも澤山通つたのだらうが、幌が下りてゐたので気がつかなくつた。木屋町の旅宿に往來する藝子ださうで、まだ十八九と見えるのが丸髷に結つて居るのもある。今年の櫻は雨につぶれ

てしまつて待設けてゐた花見客がすっかり外れたと宿の女將はこぼしてゐたが、それでも京の春は流石に艶だ。雨氣を帯びた高臺寺、清水あたりの櫻が松の木の間薄紅く見えそめて、豁と明るくなつた夕暮近い春の日は加茂川の水に三條の橋の影を落す。余は双眼鏡を取つて見るともなしに其車上の美人を見る。

相乗りの美人は大概一人が若くて一人が年とつて居る。若し若いのが二人相乗りをして居ると、其後について走る一人乗に年とつたのが乗つて居る。と見て居る間に眞赤な色をした相乗が一臺來る。これは二鉢の牡丹を車に積んだやうに派手だ。舞子だ。早速双眼鏡に入れる。つく／＼と見て余は驚く。三千歳だ。二人乗つて居る一人の方は誰か知らぬが其一人は慥かに三千歳だ。三千歳に相違無い。今何とか片方の舞子に言つて濃い紅のついた唇を少し曲げて笑つた顔が手に取るやうに見える。片方の舞子が頭の短冊ビラに手をやつて一寸容子をした其右の手で暫く三千歳の顔が隠れる。今こちらから擦れ違つた車があ

る。これは若い藝子であるが、二人の舞子は同じやうに首を曲げて挨拶した。藝子も烏田の髪を片手で壓へつゝ振りかへり乍ら會釋した。三千歳はこちらをむく。はつきりした黒瞳勝ちの眼がしかとこちらを見る。鏡裏の三千歳は咫尺の間に在つて呼べば答へさうに見える。双眼鏡を外して見る。忽ち遙か彼方の三條の橋に戻つて澤山の車と澤山の人が小さく往來して居る。

三千歳の車が橋を通り越した時分、

「お連れのお客様がお越しやしたえ。」と宿の女中が注進に來る。阪東君が來たのだ。大きな革靴を女中に提げさせて這入つて來る。

「折角君と此地に再遊するのだからと思つて二三日の餘裕を拵へて來た。矢張り京の春はいゝなあ。」とどつかと縁側の座蒲團の上に洋服で胡座をかく。

「今君三千歳が通つたよ。」

「三千歳?。」

「もう忘れたのか。あの一念といふ小僧の……。」

「ウム／＼あいつか。何處を?」

さういひながら阪東君はサツサと洋服を脱いで浴衣に着替へて、今女中の案内して來た風呂に行く。余は再び欄干に靠れて東山傳ひに叡山を見る。横河の和尚さんの事、落の臺の田樂の事、一念の事を思ふ。一念を思ふ心は又三千歳を思ふ心となる。ハッピーとい返辭、大きな赤い燭臺、松勇、玉喜久、喜千福、お花、お艶もなつかしい。

阪東君に代つて湯に這入る、湯から出て兩人で一酌を傾ける。東山の丁度南禪寺の裏手にあたる邊の低みから大きな春の月が出る。圓い。考へて見れば十五夜だ。

「え、お月様どすなあ。」と女中がいふ。鴨東にはつらくと灯がともる。三條の橋の上に灯が走る。枕に鳴る水音が晝より高くなる。阪東君は相變らずよく飲む。顔を朱のやう

にして肉づきのいゝ胸をくつろげて盛に飲む。

一 力

余は頻りに手水に立つ。三度目か四度目か忘れたが兎に角いゝ月を暫く縁さきで眺めてそれから座敷に歸つて見ると、廣い座敷が一面に煙つて居る。三千歳も松勇も耳を壓へて一生懸命に火鉢の中を見つめて居る。來吉といふ婆さんの藝子は三味線を弾いて居る。其來吉の後ろに小さくなつて恐がつて居るのは、きし勇にお福といふこれはいづれも見習のまだ十一二の舞子である。余の居らぬ間に新たに來てゐる一人の若い藝子は誰かと思つて見ると喜千福だ。去年はまだ舞子であつたのが、今年はまだチャンと藝子になつて居る。阪東君は煙の濛々と立ち昇る火鉢を睨みつけて、左右の手を仁王のやうな恰好にふり翳して居る。

松勇が余の顔を見て、

「手づまとな、おしやすのどすえ。大きな音がしますえ。」といつて一寸放してみた手を又耳に當てる。三千歳は耳に手を當てたまゝで笑つて居る。火鉢の中には大きな火を立てかけた中に一本の手紙らしいのがもう殆ど燃えてしまつて黒い灰が棒立になつて、處々思ひ出したやうに又ちら／＼と燃える。

「それ鳴るえ。と喜千福がいふと、

「ひやあ。」と松勇は立上つて逃げようとする。

「あていややわ。」と三千歳は美しい濃い眉根に皺を寄せる。僅か一年の間に三千歳は大分大人びて居る。阪東君は其振翳してゐた両手を恐ろしい勢で打合はせたが、終に何の音もせず黒い灰が崩れてしまつた。來吉の三味線がパタリと止む。

「これは風變りの手づまやな。」と來吉は眞面目な顔をしていつて煙草を一服吸ひつけたの

が此場合をかしかつたので皆が笑ふ。

「えらい煙やこと。」といつて仲居のおとよが障子を明けると、煙は姪に逃げて春の夜の心地よい風が僅かに吹き込む。今迄火鉢の中に、舞子の袂の風にも立たうとしてゐた文殼の灰がばつと浮き立ち上つてその邊に散る。四人の舞子は固より喜千福も來吉も手で空を拂ふ。中にも大きな一つの灰はふいと眞直ぐに立昇つて天井の邊で彷徨ふ。四人の舞子も二人の藝子も皆一齊に此大きな灰を見つめて居ると、繼かに吹き込んだ風も今は靜まつて、其灰はふは／＼と三千歳の頭のあたりに降りて來る。

「いやらし。」と三千歳が又眉根に皺を寄せて袖で拂ふと、今迄形を崩さなかつた大きな灰がばつと散つて見えなくなる。

「もう手づまはおしまひかい。」とたづねると、

「まだある。がもう止さう。ねえ來吉さん。」

「あゝさうおしやす。子供等に蟲が出るといきまへんよつて。」と來吉は言つて、

「喜千福はん、何ぞおひきまへんか。」と自分の三味線をかす。

「おほきに姉さん何ひきまほ？」と喜千福は三味線の調子を合はす。きし勇とお福とが春雨の相舞をする。去年迄は此處に居る三千歳や松勇と京の四季を相舞した喜千福がげそりと赤いものを落して、藝子になつて、去年は見なかつた新らしい二人の舞子の地を弾くのも面白。

「三千歳さん、此頃一念はどうした。時々遊びに来るかね。」と余は聞く。

「知りまへん。」と三千歳はいつもの癖の頭の花櫛に手を遣る。

「一念はんで誰え。」と來吉が聞く。仲居のおとよが、

「それ、あの繩手のお藤はん。あの人の甥に、あの横河たらいふとこのお寺に行てやはるお小僧はんがおすやろ。」

「はあく。あの小僧はんが一念はんとおいるのか。」と來吉は又煙草を一服吸ひつける。こちらでは、

「一念はん昨日來とゐたて本當か。」と三千歳は小聲で喜千福に聞いて居る。

「はあ本當え。あんた昨日はお出でやへなんだのか。」

「はあ。昨日は宇治へ行てたの。」と二人でひそ／＼話す。

阪東君は倒れてしまつていくら起しても起きぬ。雑魚寝をして歸ることにする。二階の大廣間に床を取つたとおとよが言ふ。阪東君はおとよに任して余は二階に上る。二十餘疊の大廣間に這入ると只一つの行燈が點つてゐるばかりで暗い。よく見ると二人寝の大きな蒲團が三所敷き流してある。二枚重ねた絹の敷蒲團の上に純白の敷布が延べられて、夜着

は紅絹の赤い裏と紫の袖とを見せて二つに折つてある。近よつて見ると行燈の赤く塗られたのも艶に見える。暫く経つと此處に這入つた時よりは明るくなつたが、それでも凡てのものは皆朦朧として、二間の床に掛けてある大幅も、長押しにある額も、遠くに見ゆる衝立も凡て朧ろくとして、さなきだに廣い座敷が愈々廣く、高い天井が愈々高く見える。余はお艶が着せて呉れる寝衣ねえに着更へる。お艶は行燈の火影かで余の着物を疊む。

「あぶのおつせ。」といふおとよの聲が聞える。阪東君が酔歩蹣跚まよまよとして這入つて来る。おとよの着せて呉れる寝衣に着替へて其儘もう寢床の上に横になる。おとよは阪東君の着物をたゝむ。行燈の朧の火影で見るとお艶もおとよも皆同じやうな丸髻姿で、同じやうな帯を締めて、どちらとも見分けがつかぬ程である。

阪東君は、

「酔つた〜。」と同じやうなことをいつてゐたが、もう酒氣を吐いて眠つて居る。余も足

を踏み延べて手を胸の上に置いて靜かに呼吸して見ると、初めて自分の酔うて居る事がわかる。おとよもお艶も去つたあとは寂寞として我等二人の外に人影が無い。いつの間にかうと〜とする。

ふと氣がつくと何かひそ〜と話す聲がする。目をあけて見ると入口の金の衝立を背にして三人の舞子が何事かをかして居る。何をして居るのかと見ると何か舞の手を温さつて居るらしい。一番背の低いのはきし勇であらう。他の二人は三千歳に松勇らしい。行燈の火影に遠いので顔も着物の色もはつきりわからぬが、只寝衣に着替へて來た爲であらう、頭だけもとの通り大きくつて肩から下はげそりと瘡かさせて居るのがわかる。何か三人でかすかに笑つて残りの蒲團の上に三人ともどたりと坐る。三人とも寝衣の上に黒繻子の襟のかゝつた友禪の長い半纏を着て居る。蒲團の上で向き合つて坐つて昨日の宇治のお話をするらしい。三千歳と松勇とは宇治に行つてきし勇は行かなかつたものと見える。二人で何か話し

合つて笑ふのを、きし勇は羨ましさうにふん／＼と聞いて居る。

「あてな、昨日あの段々を降りる時にこけてな、けふはお尻おしりがいたうて／＼かなんのか。」と三千歳がいふ。

「さうか。強うお打ちたんか。」と松勇が聞く。

「はあ、本當ほんまにいとおしたえ。多勢の前で泣くことも出来へんし。」

「そやつたろな。」ときし勇は其話も羨ましさうに聞いて居る。

「あて、何處どこい寝まひよ。」ときし勇は一寸思案する。

「あんたら二人あちらへ寝とくれやす。あたし寝かへりにも痛うて／＼かなはんさかい此處へ一人で寝るわ。」と三千歳は顔をしかめて居る。

「あていやゝわ。あんたあつちいお行きやはい。」

「あてかなはんわ。」と三人で譲り合ひをして居る。

「それよか三人一緒に此處へ寝まほか。」ときし勇はよい智慧をしぼり出して首をかたげて言ふ。

「さうしまほ。」

「さうしまほ。」と忽ち此議に決して、三人は言ひ合はしたやうに半纏を脱いでそれを袖疊みにして枕許に並べて、又言ひ合したやうに懐から小さい紙入を出してそれはすぐ枕の傍へ、これも同じやうな位地に置く。それから三人で何か喋りながら一緒に蒲團を着る。同じやうな頭が蒲團の中から出る。松勇は都踊の話をしてゐたが、「あて此處の手が一番好きや。チ、ンツテチテンチレツンテチチン。」と口三味線を言ひながら蒲團の上へ手を出して踊の眞似をする。

「ツ、ンテチンチトチチレトチチレシャ／＼シヤン／＼。」ときし勇がそれについて同じやうに手を動かす。

「あゝ誰やら來やはつた。」といつて松勇は口三味線を止めて耳を翫^{もた}てる。岸勇も止める。足音が止つて襖が開く。這つて來たのはおとよだ。

「どうおしたん。そないに三人で固まつて寢て。さあ三千歳はんに松勇はんはあつちへ行てお寢やす。」とおとよはいふ。

「あてなあ姉はん獨り残つて恐^{こそ}すわ。」ときし勇は泣きさうになる。

「あとで私が來て一緒に寢たげるわ。」と言ひすて、おとよは歸る。松勇は阪東君のどたりと腕を伸して寢てゐる傍へ小さくなつて這入る。三千歳は余の蒲團の外れの方に向いて背中ががらんと開いたのも構はずに寢る。十二のきし勇は獨り別の蒲團に取殘されて怨めしさうに目をパチクラ／＼させ乍ら此方を見て居たが、いつの間にもやら其目を塞いで寢る。其内三千歳の寢息も聞える。余もいつの間にか又眠る。

行燈はまだ點つてゐるがもう障子が明るい。枕許の時計を見ると五時過だ。三千歳はい

つの間にか寢返りをして余の方を向いて寢て居る。去年一念と一緒になつて余の悪口をいつた面影がまだ残つては居るが、曉の光で見る厚化粧の白粉の顔には光澤のないのがうら淋しい。あまり端に寢た爲に背中が蒲團の外に出て居る。赤い長襦袢を着たチョンポリした小さい肩に靜に蒲團を被せてやる。横河の寺に白衣を着て居る一念を思ふ。昨夜喜千福の話に、一昨日此内へ遊びに來たと聞いた。まだ伯母さんの宅に居るだらうか。今日序であつたら尋ねてやらうと思ふ。

小さいきし勇はおとよにも來て貰へず大きな蒲團の中で一人淋しさうに熟睡して居る。

九 阜 堂

お藤さんは三十を過ぎたか過ぎぬであらう。心がらか面さしも一念に似て居る。「一念君は時々遊びに來ますか。」

「よう参りますえ。あんたはん一念知つとゐやすのどすか。」

「去年叡山へ行つた時横河の寺で會ひました。機嫌ですか。」

「一昨日から又歸つてますのどつせ。」

阪東君は今晚月がよければ昨日の文段の残りを鳥邊山で焼き棄て、所謂北邙一片の煙にしてしまはうといふのである。

「面白おすなあ。ことによつたらお供さして貰ひたうすが。」とお藤さんはいふ。

其處へ下駄を鳴らして歸つて来たのは一念である。暫く僕の顔を見てゐてニツと笑んだが、其儘儀もせず奥へ行き過ぎようとする。

「これ一念、たんでお時儀をおしんのや。」

一念はそれに答へず突立つて居る。一年の間に背丈が延びて、白衣の下に出た足が長い。

「君、去年の手帳を持つて来たよ。僕の宿へ遊びに来給へ、見せてあげるから。君の書い

た横河の和尚さんの畫もあるし、喜千福の顔もあるし、三千歳さんの書いたなぐといふ字もあるよ。」

「君、今年は横河へ来ないのかい。」と一念ははじめてなつかしさうに口を開く。

「あんな耳の動く和尚さんの所へはもう眞平だ。」と阪東君はからかふやうにいふ。

お藤さんは一念の横顔を振返つて、

「まるであんたはん方を友達のやうにしてゐるのどすえな。」といつて笑ふ。

「え、親友です。一念君、今晚いゝ處へ連れてつてやるが一緒に行かないか。」

一念は一寸振り向いたが返辭をしなかつた。

「お藤さん、本當にあなた行きますか。」

「連れて行つとくれやす。」

「それではすぐ出直して來ます」といつて余等は表に出る。あとで、

「伯母さん、いつたい何處へ行くのサ。」と一念は聞いて居る。
表に出ると十六夜の月が既に智恩院の後ろの山を離れて居る。

鳥部山

阪東君とお藤さんと一念と三千歳と一力の仲居のおいまと余と總勢六人は打連れて祇園を抜けて鳥居本の前を過ぎて産塚坂を上る。宿に歸つてから阪東君の晩酌が長びいたのでもう彼はれ十時であらう。祇園のあたりは流石にまだ人出があつたが、清水にかゝつてからは兩側の店は悉く戸を下ろして月が獨り大空にかゝつて居る。

三千歳の顔は今朝曉の光で見た寝顔とは違つて又生れ變つたやうに生き／＼と美しい。玉蟲色の唇が月の光では墨の如く黒く見えて、笑ふ度に兩方の鬢に小さい影が出来る。一念は何かにつけてからかふ阪東君の傍をついと離れて三千歳に並んで歩く。後ろから見

と坊主頭と京風の大きな鬢の高さが丁度同じで肩は三千歳の方が低い。

「一念はん、鬼事しまほか。」

「なかがえゝこと。それより鳥部山のお墓の中で隠れん坊でもおしやす。」

「いやゝわそんな恐い事。さあつかまへしまほ。」

「そんなら皆でしまほ。」

三千歳は一念に何か耳こすりをして、

「鉄除けにしまほ。」といふ。

「鉄のけラツシン。」と皆が手を出す。阪東君だけ石を出して直ぐ鬼になる。

「かなはんわ。あてばつかり追ははつて。」といふ三千歳の聲が聞える。清水の前の坂を走り上りながら月下の人影が散らばる。

清水を左に見てだら／＼と下りるともう鳥邊山の墓原になる。

お傍傳兵衛の墓のある寺の白塀に添うてある。月が明る過ぎる程である。お寺の中で火の用心の拍子木が鳴る。

「あの松の枝ぶりは首くゝりの松とでも言ひさうだな。」と阪東君が空を仰ぐ。

「おゝいやらし。」と三千歳はこはく松を見る。月が丁度其差し出た枝の上にかゝつてゐる。阪東君は其松の木蔭の方へ行く。皆ついて行く。

石塔の間を縫つて松の木蔭に這入る、今迄月光を浴びてゐた處とは違つて大變暗い。只處々に木の間を洩るゝ月明りが網の目のごとくちらつくばかりである。松の木の根に大きな石塔が一つある。足下は急な崖になつてゐて其崖の半腹から下は又月光が豁くわつと一面に當つて同じく廣々とした墓場になつて居る。阪東君は懐から風呂敷に包んだものを出す。風呂敷を解くと中から一束の文殻が出る。

「一念君、君火をつけてくれ給へ。」と阪東君はマッチを一念に渡して澤山の文殻を薪の如

く地上に立てかける。一念は黙つてマッチを受取つて磨る。マッチの火は容易く一本の文殻に燃え移ると直ちに又他の文殻に移る。如何なる恨の文字といふ事も、如何なる艶かしい文字といふこともわからずに只焼ける。一つの文が灰になつて倒れたかと思ふと次の文が燃えつゝある。其文の燃え倒れる時次の文が又燃える。斯の如くにして阪東君が今度此地に持つて來た數十本の古びた女の手紙が袋のまゝ一本も残らず焼けてしまつた時、一念は又マッチを磨る。其火は地上に白い文殻の灰を照らす。皆残り惜しげに其灰を見る。一念は又マッチを磨る。今度の火は傍にある大きな石塔の側面を照らして石の膚の乾いた苔を見せる。三千歳が、

「お墓の横に董がおした。」といふ。一念は又マッチを磨つて地上を照らす。成程石塔のすぐ下に二本の董の花が咲いて居る。

「淋しい火どしたなあ。」とお藤さんはいふ。

「昨日手づまをするちうておだましやつたのも、これやつたんやわ。」と三千歳はいふ。
六人が松の木蔭を離れると月光が又晝のやうに明るい。」

風流懺法後日譚

「阪東君。君と京都に遊んで『風流懺法』『續風流懺法』を書いてからもう何年になるであらう。十二三年の月日は夢のやうに過ぎてしまつた。あれがどの邊まで事實で、どの邊まで拵へ事であつたかといふ其境目の如きは、最早大分臆氣である。一念や三千歳や横河の和尚さんの如きは、果して此の世の中に存在してゐた人間であつたかどうか。私は存在してゐた人間のやうな心持もするし、又存在して居なかつた人間のやうな心持もする。

併し君と共に十二三年前京都に遊び、淋しき横河に數日を過ごし、更けやすき春の夜を祇園に過ごした事だけは事實である。さうして帯をだらりに結び、花櫛をさし、口紅を玉蟲色につけた舞子が澤山立の蔭から現はれたのも事實である。あの時分の事を思ひ出すとなつかしくもあるし淋しくもある。

唯お互に世事に忙しくつて滅多に出逢ひもせぬばかりか、たとひ出逢つても其時分の

事を話す機会も殆ど無いと言つてよい。それが今度久しぶりに京都に来て、例の三條の宿に泊つて居ると、彼の宿の前を流れる古い馴染の鴨水はいつか僕に一念、三千歳の其後の情話を囁いてくれるではないか。即ち僕は宿の机に靠れて其鴨水の囁くまゝを筆記して君の許に送ることにする。どこまでが事實でどこ迄が拵へ事か、それは僕にも判断がつかない。固より君にも判るまい。要するに鴨水の囁くまゝである。

話は一念三千歳が十五の春を以て始まるのである。

—

白河口の茶店の前に五臺の車がどや／＼と梶棒を下ろした。

「おいでやす。」と茶屋の神さんは勇ましく聲を掛けたが、車から現はれ出る人々のけばけばしい服装をちつと見つめて暫く庭に立つてゐた。車の中からは一人の客と一人の藝子と

二人の舞子と一人の仲居とが現はれたのであつた。

「どぼ／＼では登れんよつて、さあ草履とおはきかへや。」と仲居のお今は大きな聲をした。

「誰が乗るのどす。」

「どつちが乗るのどす。」

「わてやわ。」

「わてやわ。」

三千歳と玉喜久とは争うて其處に在る一庭の山鴛の上にもたれかゝるやうにした。同じやうな頭が二つ並んで背丈も似てゐた。

「どちらでもお乗り。そして道で坊さんに逢うたら代るのえ。」とお今は言つた。

「そんならわてが先え。」と三千歳はもう駕の中に腰を下ろして、玉蟲色の唇をすこし開けて笑つた。

お今が取り出した赤い切れで、皆はき換へた草履にあとがけをした。

「姉はんよう気がついてあとがけの用意迄して来やはつたんやな。」と自分の右足を内股に踏んで見て、小ぢんまりと足にくつゝいた草履の其あとがけの赤い切を感心したやうに見て藝子は言つた。

「ぼち／＼出掛けまほか。」と駕屋は催促するやうに言つた。

「旦那はんよろしおすか。さあ皆えゝか。」とお今は一同を振り返つた。

二人の駕屋が息杖をついて、

「よい。」と掛聲をして昇ぎ上げた駕は軽さうであつた。

「駕屋さん、途中で一遍おとしてあげてんか。」とお今は言つた。

「さやゝわ、姉はん。」と駕の中の三千歳は訴へるやうに言つた。

白川の上流がおしまひになる邊から人の往來も絶えて、一行は三千歳の駕を中心に笑ひさゝめき乍ら登つて行くのであつた。

途中で坊主に出逢つて三千歳は駕から下ろされ、玉喜久が代つて乗つた。

お今が三千歳の裾をからげてやり、あとがけをしてやる間に、玉喜久を載せた駕はもう四五間も先へ行つて一同はそれを隔んで登つて行つた。急な登りで皆喘ぎ／＼登つた。

七回りに出ると琵琶湖がぱつと眼下に展けて、そこを走る汽船がおもちやのやうに小さく見えた。それからの道は暫く樂であつた。

辨財天の前の茶店で休むことになつた。

「わてお腹が減つた。」と三千歳は言つた。

「わても。」と駕から出た玉喜久も言つた。

其處の床几に坊主が一人腰掛けてゐたので、又三千歳が駕に載せられ、玉喜久が歩く番に廻つた。

不動堂からの登りは一番えらかつた。

「えらい坂やこと。ふとい木がおつせなま。」

「つめたい風が吹いて來ること。」

お今と玉喜久は話しながら登つた。

三千歳の駕により添ふやうにして歩いてゐた玉喜久は、けたましい鳥の聲におびやかされて言つた。

「あの聲何どす。」

「鳥どすがなあ。」同じやうにおびえた三千歳は駕の中から言つた。

「何ちう鳥か知つといるか。」とお今は聞いた。

「知りまへん。」と三千歳は答へた。

「もう此坂をだら／＼と下りると中堂さんどす。」と坂を登り詰めた駕屋は息杖を棒にかつて汗を拭いた。

杉木立が屏風をたてめぐらしたやうに茂つてゐる中に、根本中堂の大きな建物が隠れてゐた。

「こゝどすか姉はん、一念はんのうちは。」と三千歳は駕の中から目を見はつて其淋しい大きな伽藍を見た。

「一念はんは横河やないかいな。」とお今は言つた。

「横河はまだ遠いのどすか。」

「さうどす、五十丁餘りあります。」と駕屋は答へた。廣々とした道を駕屋も足をゆるめて

そろ／＼と歩いてゐた。

「姉はん、横河まで行きまひよ。」と三千歳は駕の中で言った。

「これから横河までは大變や。それに怖い道やわ、なあ駕屋はん。」とお今は言った。

「蛇やら蟬やら、けつたいなものがたんと出ます。」と駕屋も言った。

「そんなことうそやわ。一念はんいつでも下駄ばきで来るといははつた。」
三千歳は駕の中で言った。

大きな道が十文字に交叉してゐる角に茶店があつて、其處に駕が下ろされて一行は縁臺に腰をかけた。婆さんの酌んで出す茶碗を取つて皆飲んだ。

一念が今日此の東塔の方に来てゐることがふと茶店の婆さんの話で判つた。

「あの小僧はんなら今の先此前通らはつた。もうすぐこゝい歸つて来やはりまつしやら

う。」と婆さんは言つた。

一同は興ありげな顔をして此婆さんの言葉に耳を傾けた。

「ほんまどすか、お婆はん。」と玉喜久は言つた。

「うそいうてどうしますかいな。ほんまどす。」と婆さんは首を大きく動かして自分の話を保證して見せた。

「三千歳はん……」と玉喜久が振り返つた時、三千歳も顔を玉喜久の方に向けてゐた。

「三千歳はん、しつかりおしん。」とお今は言つた。

茶店の前の路をはさんで杉の木立が立つてゐた。今其木立の中にちらと形を見せ乍ら此方に歩いて来るのは疑もない一念であつた。手には風呂敷包をぶら下げてゐた。もう此方の一行を先方が認めたらうかと思はれる時分に彼の姿は又杉木立の蔭に隠れてしまつた。

三千歳は何とも言はなかつた。興奮した顔は稍よのぼせて、其杉木立の方を見詰めてゐ

る眼は輝きに満ちてゐたが、彫りつけた彫像のやうに身じろぎもしないで息を詰めてゐた。再び木立の中に現はれた一念は、今度は其目口鼻さへ大方想像がつく位にはつきりと一行の目に映つたのであつたが、すぐ又二本並んでゐる大きな杉に隠れて見えなくなつてしまつた。

「しんきくさ。」とお今は床几を離れて茶店の軒下に立つた。

二本の大杉から抜け出した一念は暫く此方を見つめてゐたが、お今の招いた手に應じて一寸頭を動かした。

「早うおいなはい。」とお今は呼んだ。

玉喜久は三千歳の手を取つて、これも軒下に立つた。明るい外面の光の中に二人の姿はつきりと浮き出たやうに現はれた。二人は同じやうに赤いハンケチを上げて振つた。玉喜久が振りやめた時に三千歳はまだ振つてゐた。

茶店の前に来て立つた一念は、暫く見ぬ間に著しく背丈が延びたやうにお今には見えた。離れて見る時は、同じ十五でも三千歳の方が姉さんのやうにませて見えるのに、並んで立つたところを見ると三千歳の鬢が漸く一念の耳許の邊に在つた。

「一念はん、横河へお歸りるのか。」と三千歳は心配さうに聞いた。

「今日は宿院に来て居るのだよ。」

「宿院てどこえ。」

「すぐそこさ。」と一念は茶店の横手に在る一つの堂の後ろの方を教へた。

「そんなら今日一日そこにお居るのえな。横河へはお歸りやへんのえな。」

「和尚さんさへ歸らなきやあ。」

「三千歳はん、そんならもう横河へ行くことはいらんやないか。それでもまだ横河へ行き

度いか。」とお今は調戲ふやうに言つた。

「三千歳さん宿院へ遊びにおいでよ。玉喜久さんもおいでよ。」と一念は暗い土間の縁臺に腰かけてゐる客を流し目に見て言つた。

「行てもかまへんのか。」と玉喜久は三千歳の手を取つて言つた。

「僕一寸行つて来る。」

一念は玉喜久の言葉には答へずに、風呂敷包みをぶらつかせながらさつさと宿院の方へ行つた。

「一念はん早う來とくれやすや。」

「すぐおいなはいや。」

三千歳と玉喜久とは手を繋ぎながら二三步其あとを追ふやうにして聲をかけた。

大きな雨が一つぼつりと茶店の前の大地に落ちたと思ふと、地の底の鳴るやうな物凄いい響がいつくともなく聞えた。

「あれは何やろ。」とお今は不思議の目を上げた。暗いのに慣れてゐた土間が一層暗くなつてゐるのに氣がついた。大粒の雨は三つ四つと数を増して來た。

「恐ろしい天氣になつて來た。」と駕屋が言つた。クワチ／＼といふ凄まじい響がして頭の上で雷が鳴つた。

「あて恐はいわ。」と玉喜久はお今の傍で襟を縮めた。三千歳は青さめた唇をして外を見た。そこにばつと目を横ぎつた青い光があつた。

此天氣に講堂や中堂あたりに居た參詣人が皆此の茶店に駆け込んで來た。それ等の人々はめい／＼同じやうな事を言つて騒いでゐた。三千歳や玉喜久の艶な姿を不思議さうに見るものもあつたが、其暗い土間を晝のやうに明るくする稲光りの度に孰れも聲をあげて恐

れた。其どよみの終らぬ内に大きな音が頭の上で碎けてそれが山全體に鳴り響いた。

孰れも唯神鳴りを恐れるばかりであつたが、その中に三千歳は一念の事を考へてゐた。いつも祇園の明るい燈火のもとで逢ふ人を、今日初めて此の山の上で見出したことが淋しかった。

「斯んな山の上に居やはるのかいな。あゝ可哀そやの。」

さう考へた時には涙がにじみ出た。祇園で逢ふ度に山の上の話はよく聞いた。けれどもそれは唯だ面白半分に聞いてゐたのであるが、實際斯うやつて來て見ると、斯んな淋しい處かと驚かれるばかりであつた。

「一念はんはどうしてゐやはるのやらう。又何處かへ使にやられて此の神鳴りに出逢うてゐやはるのやらか。早うこゝへ來てやはつたらえゝのにな。」と思ひ續けた。

神鳴りは愈々募つて來た。ガラス障子の外は眞暗になつて來た。それが稻妻がする時は

一時に明るくなつて、茶店の前の出世大黒天の玉垣も、「榮西禪寺舊蹟」とある文字も、杉の中に隠見してゐる中堂も講堂も手に取るやうに一目に見えた。

「恐ろしい天氣やな。どないになるやらう。」といふものがあつた。其心細い言葉が三千歳の心をおびえさせた。

「玉喜久はん。」と三千歳は玉喜久の手を堅く握つた。

「三千歳はん。」と玉喜久も同じやうに握りしめた。

「二人とも心配おしることあらへん。しつかりしとゐ。」とお今が言つた。

雨が大地を掘るやうに降り出した。家が揺るぐやうな神鳴りが鳴り續けた。三千歳と玉喜久はお今の膝に取りすがつて慄へてゐた。

其時であつた。稻光りに照らし出された外面を三千歳が見た時に、其晝よりも明るい稲光りの中に、三本の傘を脇に抱へて、自分も傘をさしてゐる一念の姿が慥かに見られたの

は。

「あゝ一念はんや。」と三千歳は覺えず大きな聲をした。が、其聲は鳴りはためく雷の響きに消されて誰の耳にも聞きとれなかつた。忽ち天地は眞暗になつてしまつて、一念の姿はもう見えなかつた。

再び明るい稻妻が土間の中に蠢いてゐる人を照らし出した時に一念は其處に立つてゐた。

「三千歳さん、宿院へお出よ。こんな大勢居るところでは仕方がないぢやないか。皆來給へ、いゝから。」と一念は言つた。

「行きまひよ。」と三千歳は即座に立ち上つた。外には稻妻の光つてゐることも雨の降つてゐることも忘れたやうに。

「行きたいけど、こはいわ。」と玉喜久はおびえたやうに言つた。

「宿院といふところは、こんな風していてもかまへんところやろか。」とお今は三千歳や玉喜久の姿を振り返つて心配さうに言つた。

「構ふものか。來てしまへばいゝのだよ。」

さう言ひながら脇に抱へて來た其三本の傘を人々に渡した。

「あて一念はんの中に入れてもらはう。」

さう言つた三千歳は、先きに立つて出て行く一念のあとを追ふやうにして行つた。

「えゝぜ。」

「綺麗なこつちや。」

「何處へ行かはるのやらう。」

「小僧はんと舞子はんとは面白い取り合はせやな。」

「えらい粹なことえなあ。」

そんな言葉が縁臺に腰かけてゐる人々の口から出た。

「お今も玉喜久も藝子も客も三千歳に誘はれたやうに立上つた。」

「三千歳はん、おいきるのなら、そんなりにして、ちやんと裾も上の方へからけて、雨に濡れんやうにして行かなどんならんえ。」とお今は叫んだ。

其時一念と三千歳はもう一本の傘の下に表に立つてゐた。

お今も傘を開いて其あとを追ふより外に仕方が無かつた。玉喜久も外面の稻光りの恐ろしさを忘れて續いた。客と藝子も亦た其あとに續いた。

其處はだら／＼と下り坂になつてゐた。一念が先きに立つて足早に行くのに皆引きずられるやうにしてついて行つた。ぱつと光る度に今度は自分の上に落ちたのではないかと皆首を縮めた。

宿院の玄關には一人の役僧が見て見ぬ振りをして居た。

「こちらへ來給へ。」と一念は言つた。役僧は向うへ行つてしまつた。

稻妻は此の宿院をも取り圍んで光つてゐた。神鳴りも同じやうに鳴りはためいてゐた。

物凄さは彼の茶店と少しの變りも無いやうに思はれた。が、一念の居ることが三千歳には何よりの心強さであつた。數知れずあるどの室も人がゐるやうには思はれなかつた。三千歳は其淋しい廊下を一念にくつ／＼くやうにして小走りについて行つた。

「一念はん。どこ迄行くのえ。こゝも淋しいえなあ。」

「それでもあの茶店よりはいいだらう。」

「そらこゝの方がえゝわ。一念はん、あて等が來てもほんまにだんないのか。和尚わうさんはどこにゐやはるのえ。あて和尚さんがこはいわ。」

「こはいものか。出て來て何とか言つても知らん風をしておいで。」

「一念はん、あんたお叱られやへんか。あてそれが心配やわ。」

「叱られたつて構ふものか。」

又激しく光つたと思ふと、頭の眞上で天地が崩れるかと思ふやうな音がした。

「こはいわ一念はん、どうしまほ。」

「こはかないよ。こんな神鳴りは度々鳴るよ。こんな神鳴りの時障子を開けて山を見て居ると澤山火柱が立つよ。」

「一念はん、そんな時に障子をあけて外を見たりおしるのか。神鳴りはんが落ちはつたらどうおしるのえ。」

「山には落ちてもお寺のある所には落ちはしないよ。」

「さうやろか。」

「安心しておいでよ。」

一番奥まつた一間に一行を導いて一念は谷に面した窓の障子を開けた。森の透間から毘

鬻湖を見下ろした廣大の景色が目の前にあつた。稻妻の光は其景色を照し出してゐた。其景色が広いだけに物凄さは一入であつた。

「いやゝわ一念はん、障子しめとくれやすな。」と三千歳は言つた。
しめられた四枚の障子も一面に稻光りを浴びた。

玉喜久もお今も藝子も濡れた袂や裾を氣にして、上着を脱いでそれを乾かすのに骨を折つてゐた。

「三千歳はん、あんたもお脱ぎや。」とお今は言つた。

「へえ。」と言つた三千歳は尙ほ脱がうとしなかつた。

「一念はんがおゐるので耻かしいのんかいな。」とお今は言つた。

「そんなことあらへんわ。」と三千歳は訴へるやうに言つた。

三千歳の上着も脱がされた。八疊の一間に美しい澤山の上着と帯との取り廣げられた光

景は艶めいてゐた。上着を取り帯を取つた三千歳と玉喜久は長襦袢姿の同じやうなかぼそい體になつてしまつた。

「頭ばかりが大きいや。」とちつと二人を見てゐた一念は言つた。

「いやゝわ。」

「いやゝわ。」

三千歳と玉喜久は自分の姿の置き場所の無いのに困つたやうな顔をして互に體を摩り寄せた。

稻妻は絶えず障子を染めてゐた。殷雷の轟きも殆ど止む間が無かつた。其間に雨は稍よ小降りになつたり、又勢を増して降つたりした。

此座敷をすつと離れた一室には横河の和尚さんが少し遠い耳にも雷の音を響かせなが

ら、書見も出来ぬ暗い部屋にぼつねんとしてゐた。

「一念は何處へ行たか。」と廊下の障子を開けて其邊を見たが何處にも見えなかつた。其時其處を通りかゝつたのは彼の役僧であつた。

「一念は何處にゐるやろ。」と和尚さんは役僧に聞いた。

「一念は此處へ雨宿りに來た別嬪の處に居ます。」と役僧は笑ひながら答へた。

「そんなとこへ遣つては困るがな。」と和尚さんは言つた。

「遣つたのではない、一念が連れて來たのです。」と役僧は又笑ひながら言つた。

そこへ姿を現はしたのは一念であつた。

「これ〜一念、お前の連れて來たといふのは誰ぢや。」

「私の知つて居る舞子です。」

「なえんでそんなものを連れて來た。」

「茶店にゐたから連れて来ました。」

「宿院もそんな女を全然入れぬといふわけには行かぬのは是非がないが、小僧の分際で勝手なことをしては困るがな。」

さう言つて和尚さんは部屋の中に引込んだ。一念は障子の外から和尚さんの方を向いて暫く黙つて突立つてゐたが、大きな足音をして三千歳の部屋の方へ歸つて行つた。

「困つた小僧ぢや。とてもわしの手には合はん奴ぢや。」と和尚さんは障子の中で屈託した目をしよぼく／＼させた。

二

月が大空にかゝつてゐた。何といふ明るい月であらう。それは下界で見る月とは違つた光りのやうに思はれた。山の上の空氣はそれだけ清透なのか、雷雨のあとのすがすがしさ

は凝つて此の一輪の清光となつたのか。

其月下の世界は一見して満目悉く睡に墮ちてゐるかのやうに静まり返つてゐた。杉木立は黒く峙つてゐた。講堂や中堂は其杉木立の中に落込んだやうに深く沈んでゐた。

人通りは全く無かつた。

鳥も啼かなかつた。

木の葉さへ動かなかつた。

雷雨の後の叡山の夜は斯くの如く凡て睡の裡に在つた。

が、それは表面だけのことである。宿院では客も藝子も起きて酒を飲んでゐた。お今も玉喜久も居た。唯三千歳の姿が見えなかつた。

老僧は書見をしてゐた。役僧は新聞を讀んでゐた。一念だけ其處に居なかつた。

二人が何處に居るかといふことは誰も知らなかつた。先刻一念と一緒に廊下を歩いてゐ

た三千歳の後ろ姿を見送つたお今は、矢張り今でも二人共廊下を歩いてゐるものゝやうに暫く考へてゐた。併し其後時間が経つても歸つて來ぬのに氣がついてから、一人心の中で心配しはじめた。二三度廊下に出て見たが其處には二人の姿はもとより何ものゝ影をも認めることが出来なかつた。唯がらんとした長い廊下であつた。お今の心は不安に襲はれ始めたが、幸に客も藝子も玉喜久も氣附かずにゐるらしいので強ひて平氣を装うてゐた。

老僧は往生要集の上に眼鏡を置いて大きな欠びをしたが、所在が無いので、又眼鏡を掛けて往生要集を見始めた。眼が往生要集の上に落ちると、それはもう何度も繰り返して讀んだことのある文句であることに氣がつくが、もう其あとから其文句を忘れて居た。老僧は又欠びをした。が、一念の事は考へ出さなかつた。

二人は何處に居るのであらう。

それはもう西塔の釋迦堂に近い處に一つの堂があつた。杉木立がそれを取圍んでゐた。

夜の叡山が睡つてゐるなど、誰がいつたのか。獨り宿院の中にある人が起きてゐるばかりでなく、大方のものは皆目醒めてゐた。

一枚の木の葉がついと落ちた。それは風があつて散つたのではなく、葉自身の重みで落ちたやうに——鉛ほどの重たさがあるものゝやうに——落ちた。

寝鳥が立つた。それは何に驚いたのか判らなかつた。其羽音は満山を振り動かすほどの大きな羽音に聞えた。

杉木立の間を通るのは一匹の猫であつた。大地を引するやうに長い尾を垂らして、あたりに氣を配りながらのそり／＼と歩いて行つた。此猫の警戒した眼つきから、彼よりもなほ猙猛なる動物が此杉木立の中に生息して居ることを思はしめた。それ等の動物は何處にゐるのか。

一念と三千歳は？

月は物凄いやうに明かに凡てのものを照らしてゐた。殊に由ありげに彼の一つの堂を照らしてゐた。

三

五年の月日が経つた。

「自分ももう二十歳になつた。」と一念は歩きながら考へた。

「此山に来てからもう九年になる。」

それは横河から西塔に出る迄の小さい山路であつて、其處は丁度山の背になつてゐる爲に風當りが強い。雑木や茅萱は風に吹き靡かされてゐる。湖水が見下ろされる。いつも見なれてゐる湖水であるが今日は違つたものゝやうに目に映る。叡山に居る凡ての僧侶の顔

が一時に一念の眼の前に浮み出て來た。萎びた顔や肥つた顔や柿色の衣や紫色の袈裟や大きな口や低い鼻やそれ等が一時に目の前に湧き出で、何れも愚かしい眼附をして自分を見下ろしてゐるやうな心持がした。

一念はそれ等の幻影を心の中で叱りつけた。

一念の髪は延びてゐた。鼻下にも顎にも薄く髭が生えてゐた。

「何といふさびれ果てた詰らない山だらう。」

愚かな眼附をした幻影が消えてしまつた目の前には、唯下らない雑木林の山の背が現はれた。

或時登山して來た一人の男が、「叡山は平安朝時代の學府で、丁度今の赤門大學だと思へば間違ひない。其頃の新智識は皆此山に居たのだ。」と言つた。

又或時登山して來た一人の男は、「昔の叡山を思ふと繪巻物を見る様な感じがする。此山

路を歩いてゐたものは緋の衣を着た僧都や紫の指貫をはいた稚兒達であつた。」と言つた。

其當時の一念は唯面白くそれ等の話を聞いた。其頃の入唐渡天といふのは丁度今の歐米留學といふやうなもので、さういふ高僧智識が此山を開かれたのだとすると、成程其頃の叡山は今の赤門大學のやうな學問の淵藪であつたに相違無いと思つた。又緋の衣を着た和尚さんや稚兒鬻のお稚兒がぞろ／＼と此山路を歩いてゐたかと思ふと、自然此山路がなつかしく慕はしく思はれもした。

併し今考へて見ると馬鹿々々しかつた。

「昔此山が大學であつたらうが、今大學でなけりや何でも無いでは無いか。昔緋の衣が通つたらうが稚兒鬻が通つたらうが、今通らなけりや何でも無いではないか。自分は何故こんな處に九年もぶらく／＼してゐたのだらう。」

顔を上げて向うの峯を見た。其處には晩春の色をとめてゐる二本の山櫻があつた。

一念の心はいつしか和らいでゐた。六年前の晩春の情景が思ひ出すともなく思ひ出された。

あの時以來一念は横河の老僧の厳格な監督の下に暫く外出も自由でなかつた。一寸使出すにも他の小僧を使つた。水を汲んだり、雑仕をしたり、布團を敷いたり、老僧の肩をもんだりすることに大方日を送つてゐた。暗い大きな庫裏には——其頃老僧は元三大師堂の方にゐた。——竈が並んでゐて、其竈の臺の下には薪がぎつしり詰め込まれてゐた。此薪は表の納屋で年とつた寺男が割つたり乾したりしてくるのであつた。此寺男を一念は好いてゐた。

「おちいさん一服し給へ。」

さう言つて澁茶を酌んでやることも多かつた。

「お前さんは年は若いが、よく氣のつく小僧さんだ。」

此寺男は東京近在の生れだといつた。自然一念とはよく話が合つた。

「己が一杯水を汲んで来てやるべえ。」

寺男はそれが一念の役目であるのを助けてやる積りで、辨慶水の水を擔ひ桶でこゝ迄汲んで来てくれる事も珍らしくなかつた。水桶といふのは大きな石の槽で、其下には水垢が黄色くたまつてゐた。一念は其水を汲んで炊事をした。

一念は三千歳に送る手紙を此男に頼んだことも屢よであつた。それは坂本の郵便函に投函してもらつたのである。

三千歳から来た手紙は意地の悪い役僧に見つかつて、老僧の手に落ちたことも一二度あつた。けれども人のいゝ老僧は訓戒を加へた後ちに其手紙を一念に渡した。

一念は見違へるやうに大人びて来た。決して子供らしい悪戯はしなくなつた。老僧のいふことをよく聞いた。けれどもお経は少しも讀まなかつた。

「一念ももう十八歳だ。いつまでも小僧扱ひにして置くことも出来ん。」

老僧がさうつぶやいたのは二年前のことであつた。けれどもそれが二十歳になつた今年も相變らず小僧扱ひにしてゐた。

それでも一念は柔順に自分の仕事をしてゐた。意地の悪い役僧も餘り口小言が言へない位に。

一念は屢よ三千歳に逢ふことが出来た。老僧の目のきびしかつたのははじめ一年位の間であつた。其後はたとひ自由といふ程ではなかつたにしてもそれ程窮屈でもなかつた。

其間に三千歳の身の上には種々の變化が起つた。其花櫛だらりの舞子姿も十六の暮を終りとして、それからもう婀娜な島田に變つて、舞扇を棄てゝ撥を持つやうになつた。其姿を見た時一念は目を瞠つて驚いた。さうして其劇變した三千歳の前にいつ迄も同じ小僧姿の自分を置くことが恥かしいやうな心持がした。が、三千歳の身の上の劇變は矢繼早に

來た。彼女は其十七の年の夏にもう一人の客に身受けせられて圓山公園の奥まつた處に團はれるやうになつた。

一念が横河の老僧の前に生れ變つたやうにおとなしくなつた時分には、三千歳も亦其養ひ親や客の前に生れ變つたやうにおとなしくなつてゐた。

「三千歳はん、此頃どうおしたのえ。」と仲居や朋輩の藝子は皆不審の眼を瞠つた。

「三千院さんの懺法が聞き度うおす。」と客にせがんで大原迄行つたのは、彼女が藝子になつてから間も無く、身受けの相談が始まりかけた頃の事であつた。

其日一念は横河中堂の裏から仰木越迄出て一目散に大原へ駆け下りた。其足は自然に三千院へ出ねばならなかつた。懺法の莊嚴な鉦の音はだん／＼近く一念の耳に響いた。三千歳の手紙にあつた時間に三十分許り遅れねばいつもの百姓家に着くことが出来ぬのをもと

かしがつた。三千院近くに乗りすてゝある美しい數臺の車はたしかに三千歳等の乗つて來たものに相違無いと思はれた。一念は自分の顔を見守るやうにする途上の人をにくんだ。

「自分は勝手にこゝを歩いてゐるのだ。それがお前達に何の關係があるか。」

一念はさう考へつゝ彼等を睨みかへすやうにした。

一軒の百姓家に三千院を抜けて來た三千歳は獨りで待ち草臥れてゐた。其眼には何故に貴重な三十分を空費させたかをなじる色が讀まれた。

身受け話のはじまつてゐることを聞いたのは其時であつた。

「何故お前はそれを厭と言ひ切らないのか。」

さう言つた一念の聲は怒に震へてゐた。三千歳は唯泣いてばかりゐてそれに答へなかつた。けれどもさういふことを言つて養母を怒らしてしまふことは、二人の爲に不利益であるといふのが此少女の考へであつた。「せつばつまつた場合にはいつも養母の無理を通させ

て置くことが結局自分の我儘を通すのに一番有利である。」といふことは彼女が十餘年の苦い経験から歸納して來た動かし難い信條であつた。

其心持が一念には解らなかつた。

一念は泣き臥す三千歳を振り向きもせず、百姓家を出て三千院の裏から山に駆け登つたのであつた。が、一念の足は二三町山を駆け登つた時に釘づけにされたやうにとまつてしまつた。疊の上に泣き臥してゐた三千歳の姿が其目から離れなかつた。彼は又山を駆け下りて百姓家に戻つて見た。其處にはもう三千歳はゐなかつた。

「我等二人の苦しい月日はあの時から際限もなく續いてゐるのだ。」

一念はさう考へながら向うの峯の二本の山櫻に又眼を放つて長い回想からさめようとした。

一念は今日は流しの上に飯櫃を洗ひかけた儘でぶらりと表に出たのであつた。さうして

歩くともなくこゝ迄來たのであつた。

向うの叢が少し動いたと思つたら其處から、頭を出したのは圓岳和尚であつた。和尚の手には叡山葦があつた。

「一念か、どこへお使や。」

さう言つて得意さうに叡山葦を見せた。

「えゝ葦やらう。こないに色のえゝ葦は滅多に無いぜ。それに咲いで見な、えらい高い薫りや。」

叡山葦はこの叡山の僧侶が登山者に誇りとするところのものゝ一つである。叡山を終生の住家と定めてゐるそれ等の僧侶に在つては、高山苔にも匂ひ葦にも悉く叡山の二字を冠して誇とした。一念も自然其叡山苔、叡山葦は傳教大師以來高僧智識の遺蹟である此の名

山の土が生やす世にも貴いものと思つてゐた。

が、今圓岳和尚の手に在る莖は下らないたゞの草にしか見えなかつた。

「そら嗅いで見な。」と和尚はそれを一念の鼻先に持つて來た。莖の香は高かつた。嘗て三千歳と顔をくつゝけて此花の香を嗅ぎ合つたと思ひ出されたが、すぐ其には腹立たしい思ひ出が伴つた。一念は其連想を掻き消さうとして絞り出すやうな聲で和尚に答へた。

「和尚さんは、それを取りにこゝ迄來られたのですか。」

「さうや。こゝの谷に澤山あることは私だけ知つとると思つたら、一念、これ見な。こんなに人の踏んだらしい足跡がある。もう大分人が知つて取りに來よると見える。」

さう言つて和尚は眼尻を下げて笑つた。此圓岳和尚といふのは十二年籠山といふことをした僧侶で、十二年間或一定の場所から下へは山を下らないといふ、古くから此山に傳はつてゐる修行の一つをやつたのであつた。それはもう十餘年も前の話であるが、何でもそ

の十一年目とかハ八瀬から草刈りに上つて來てゐた若い女と噂が立つて、折角の修行も高なしになりかけた。當時の座主は寛大な人で、それは唯噂だけであつて、決してそんなことはあつたのではないと言ひ張つて、矢張り滞りなく十二年籠山を仕遂げた高僧として取り扱はれることにつた、と斯ういふ話を一念は聞き傳へてゐた。今其話を思ひ出しながら和尚の顔を見ると、色の青い生氣の無い顔の中にもまだ人間らしい血が流れてゐて、此山にゐる他のつくね芋のやうな僧侶達よりも、何處かに人間らしいなつかしきみがあるやうに思はれもするのであつた。

「一念、お前どこ迄お使や。黒谷か、根本中堂か。」

「お使ではありません。」

「一人勝手に歩いて居るのか。」

「さうです。」

「そんなことをしてはようない。又和尚さんに叱られるぞ。よう氣をつけないはれ。」

一念はおとなしく點頭いて見せたが、心では外のことを考へてゐた。さうして根本中堂の方に歸つて行く圓岳和尚のあとを追うて大分遅れながらとぼくと歩いた。

「一念、早う歸らんといいかんど。」

半町も先へ行つたと思ふ和尚は立ちどまつて後を振り返りながら斯う言つた。一念も立ちどまつて點頭いたが、和尚が歩き出すと又そろ／＼と歩き出した。

「京の四季」の中に出て来る一つの寺の鐘がすぐ頭の上で鳴るところに別荘があつた。

「あんな淋しい處で三千歳はん、よう辛抱しといやすえな。」と藝子や仲居は噂してゐた。公園の境内かと思つて歩いてゐると、其處に竹垣があつて、其竹垣の中に這入つて行くこと門らしいものもなくすぐ玄關になつてゐる。井戸は其玄關の横手に在つて其處で女中は洗

濯をして居る。其洗濯物の竹垣の内の日當りのいい處に干してあるのが公園を歩いてゐる人の眼にも映る、といふやうな所に三千歳のお三千は大きな丸髻を結つて住まつてゐた。

一念が私かに其竹垣の中に立つた時に、洗濯をしてゐた女中は驚いたやうな顔をして此方を凝視めた。お三千の顔が洗濯物の竿の横はつてゐる窓の處に現はれたのは、それから間の無いことであつた。

「一念はんか。」とお三千は低い聲をふりしぼつて言つた。さうして窓のところを歩みよつた一念の手を取つて強く引きよせた。一念の手に握られてゐた叡山莖はすぐお三千の手に取られた。二人は顔を寄せて無言の儘暫くの間其香を嗅ぎ合つた。

「お目出度う。」と莖から顔を離した一念は丸髻に目をとめて言つた。其聲は乾いて濁れてゐた。

「そんなこと、どうぞ言はんとおくれやす。」とお三千は涙ぐみ一念の顔を見た。

洗濯の眼をあげて二人の方をぼんやり見てゐる女中をお三千は呼んだ。其耳に何事か囁かれるのを一念は黙つて見てゐた。此愚かさうな女中もお三千の新世帯を形作る一員として腹立たしい者に思はれた。女中は、

「行て参じます。」と頭を下げて一寸一念の方を偷み見て出て行つた。

お三千は一念を座敷へ上れと言つた。一念は上らうと言はなかつた。二人は同じやうに涙ぐんで同じやうに黙つてゐた。

「一念はん、本當にお久しうおした。どうぞ悪う思うとくれやすな。あんたはん本當に私が憎おすやらう。それを私は無理とは思ひまへん。けど上つてぐらゐおくれやしてもえゝやおへんか……。」

さう言つたお三千の唇は堅く結ばれて、白い露の玉がはら／＼と長い睫からこぼれた。それでも一念は黙つてゐた。

「そないに一念はん腹が立つのどすか。そんなら私を連れてこゝを逃げとくれやす。私あんたはんのお行きやすところならどこいでも行きますえ。」

お三千は一念の顔をぢつと見つめてゐた。一三年前迄はまだ全くの子供だと思つてゐた一念が著しく大人びて来て、年よりも遙に老けて見えるのを不思議さうに見守つた。

「私が悪いのどす。勘忍して早う上つておくれやす。」

黄昏れて行く窓の中に二人は黙り勝ちに坐つてゐた。

「何故三千歳さん……。」と一念は話しかけた。

「もう三千歳は止めてお三千にしておくれやす。」とお三千は言つた。

「僕はお三千さんといふ名前の人とは他人のやうな心持がする。」と一念は言つた。

「そんなことお言るのは無理といふものやわ。」

お三千の目には涙がにじみかけた。と思ふと一念の膝につゝぶして泣き出した。

一念は唯黙つて泣いじやくつてゐる女の背中を見つめてゐた。

お三千は唯泣き入るばかりであつた。一念はいつ迄も冷かにそれを眺めて手を下さうとも言葉をかけようともしなかつた。

暫くして漸く泣き止んだお三千は自分で涙を拭きながら靜かに顔をあげて一念を見た。

「私の心は一寸も變つたらしまへんさかい安心してゐておくれやすや。」

日は暮るゝに任された。窓の外の干物も取り入れられずに、外面は晝の光りが夜の光りに變りつゝあつた。

「其心持が僕には判らない。よくさうぢつとしてゐられるのね。何とかしなければ一日も暮せないといふ風な心持にはならないのかい。」と一念は言つた。

「何とかし度いのは山々どすけれど、どうも出来ぬものは仕様が無いやおへんか。」

一念にしたところで、此現在をどうするといふたしかな考は持たなかつた。けれども其

通りの心持をお三千に答へることは出来なかつた。

「僕は現状を破壊すればいゝと思ふ。僕は第一山さへ下りればいゝのだもの。」

「山を下りて何におなりやす。」

「何にでもなる。労働者にでも何にでも。」

お三千は淋しさうに黙つた。一度は年よりも老けて見えた一念が今は又もとの若い人に戻つたやうな心持がした。

「なあ一念はん、そないなことはいはずに、ぢつと時の來るのを待つてゐておくれやすや。」

さう言つてお三千は一念の手を堅く握りしめた。

時の來るのを待つといふ落着いた心持が一念には慊らなかつた。それは此女の不純な心持に萌すものとしか思はれなかつた。

「僕はもう歸る。」

さう言つて立ち上つた一念をお三千は抱きすくめるやうにして留めた。其涙は再び一念の顔の上に降りそゞいだ。

其時終にお三千の涙にほだされ和らげられた自分を、一念は腹立たしく思ひ乍ら今山路を歩いてゐた。

「あの時もさうであつた。その次の時もさうであつた。その次の時もまたさうであつた。いつも三千歳の涙に包まれて、一時の満足を得て歸つて来るばかりだ。」

一念は腹立たしさうに大地に唾を吐いた。其時向うの岨道を歩きながら尙ほ心配さうに此方をふり返つてゐる圓岳和尚のあることを一念は思ひ出した。

其時一念は圓岳和尚が何といふことなくなつた。ふと駆足で其あとを追つて行

き度いやうな心持がした。

「追ひついたところで詰らない。」

すぐ其あとからさう考へた。和尚の姿は抜き取るやうに木の間隠れになつてしまつた。

それかと言つてこれから横河へ歸る心持にもどうしてもなれなかつた。洗ひかけた飯櫃はどうなつてゐるであらう。今日此儘歸らなかつたら、老僧はじめ又一同が騒ぎ立てるであらう。

「愈々今日山を下りてやらう。」

さう思ふと俄に蘇つたやうな心持になつた。流し元に口を開けた儘突立つてゐる飯櫃などはどうならうともう問題ではなかつた。

「又こんなことが起つてはどもならんがな。」と耳を動かしながらあたふたと狼狽へる老僧を想像しても、それも問題ではなかつた。

「何故決断がもつと早くつかなかつたのだらう。」

一念は今迄に覚えの無い生き／＼とした力の體中に充ちてゐるのを覺えた。此力が今迄何處に潜み隠れてゐたのだらうかと自分でも不思議に思はれた。

一念はもう何の躊躇も無しに強い足踏をして山路を辿つた。

圓岳和尚の居る寺の前を通つた時に、一念はもう和尚の事を考へてゐなかつた。和尚の寺は森閑としてゐた。

一念の心は忙がしかつた。此山道を通る人が／＼しても近道と思つて自然に足をつけた徑は必ず見逃さずに通つた。其一つの徑に這入つて行つた時に、一念の眼の前に二つの黒い塊がぶらさがつてゐるのに氣がついた。よく見るとそれは二匹の大きな蜘蛛であつた。

それは此狭い間道の往手を塞いで二つの大きな網を木の枝に張つてゐて、其各々の網の

心に帝王の如く蜘蛛が座を占めてゐた。さうしてふと見ると其うちの稍々小さい方の一匹は風も無いのに左右に動揺してゐた。尙よく見るとそれは自分の力で網を踏張つて自分の體を揺り動かしてゐるので、他の一匹の蜘蛛に戦を挑んでゐるのであることが判つた。一念はふとこの蜘蛛の珍らしい振舞に心を奪はれて立ちどまつた。

稍々小さい方の蜘蛛は動揺を續けてゐた。其振舞は段々と強まつて益々他の蜘蛛に肉薄するやうに見えた。それはかなり長い時間であつたが一念は辛抱して見てゐた。やがて今迄靜まり返つてゐた大きな方の蜘蛛は、敵が自分を侮つて愈々眞近く肉薄して來た刹那、俄に活動を開始したと思ふと、もう其瞬間小さい方の蜘蛛は大きな蜘蛛の捕虜となつて、くる／＼と尻から吐き出す糸にからまれてしまつた。

一念は其勝負の餘り早かつたのをあつけなく思つた。こんなに早く勝負のつくものを、小さい蜘蛛は何を好んで戦を挑んだのか、まことに身の程知らぬ愚かな振舞であつたと言は

ねばならぬと考へた。さうして今はもう大きな蜘蛛の脚にしかと握られて、其口から生血を吸ひ取られつゝある蜘蛛をあはれと見た。

「お前は何故戦つたのか。」

一念は心の中で更に繰り返しつゝ其あはれな蜘蛛を見た。

「どうしても戦はねばならなかつたのか。戦はずにすまずわけには行かなかつたのか。……さうだらう、戦はずにすまずわけにはいかなかつたのだらう。」

其處迄考へて来て一念ははじめて謎が解けたやうに覺えた。こゝに計らず二匹の蜘蛛が網をならべて對陣した。小さい方の蜘蛛が逃げてしまへば何でもなかつたのだらう。けれども此蜘蛛は逃げるといふことが出来なかつた。それは此蜘蛛が斯かる時勝算が無くつても戦はねばならぬ本能を持つてゐたからである。こゝに於てか小さい蜘蛛は其大敵に接近した刹那忽ち一命を墮すものであることを既に運命づけられてゐたに拘らず、敢て戦を挑まねばなら

なかつた。斯の如くして戦ひ斯の如くして敗れた。

「宜しい、それでお前も成佛するがよい。」

一念は其處に在つた手頃の石を拾つて、敵を抱いて喜ばしげに血を吸つてゐる大蜘蛛目掛けて擲げつけた。石が命中したと思ふと其處に三つの塊が別々になつて——石と大きな蜘蛛と小さな蜘蛛とが——向うの叢の中に落ちるのが見えた。空しく残つた二個の蜘蛛の網を一念は折り取つた竹の枝で拂つて一目散に走つた。

三

お三千は彼の旦那の傍に居たゝまらなくなつて臺所に來た。此二三日彼の旦那はお三千の家に逗留して歸らなかつたのである。

お三千の旦那の小寺正造がお三千の家に置いて行つた小切手を、お三千が一枚破つて私

かに隠して置いたのは少し前のことであつた。其後正造の來た時に眠りに入つた枕許に置いてある藁口の中から印形を取り出して其小切手に捺印したのもそれから間の無いことであつた。其小切手にはお三千の手で——剔めて正造の字に似せるやうにして——貳拾圓也、小寺正造と書かれた。此小切手は即日銀行で現金に替へられて、其金は正造にあからさまにいふことの出來ない焦眉の急の拂に當てられた。

お三千は其事は一念にも言はなかつた。其貳拾圓は遠からぬうちに或人の許から自分に届けてくれる金があるそれで埋め合はす積りで居た。

「其金さへ來ればすぐ銀行に預けに行かう、さうすれば帳尻は合ふ筈だから。」

お三千はさう考へて或人から届く金を待設けてゐた。けれども其金は豫期してゐた日に届かなかつた。どうかした機會に其事が正造に暴露しはしないだらうかと不安を抱き乍ら數日を過ごした。

此二三日正造はお三千の家に來て逗留してゐた。さうして今日晩飯をすませてから歸ると言つた。今日は其鞆の中から種々の帳簿を出して計算を始めなどしてゐた。

正造は戲言のやうに傍に居るお三千に言つた。

「お三千、お前には色男が出來たな。」

「色男て何どす。」

お三千はさういふより外に此場合言葉が見出せなかつた。

「色男は色男さ。色男に貢いだりなんかしてはいけないよ。」

「あほらしいこと言はんとおくれやす。人を馬鹿にしてかなはんわ。」

お三千は怒つた風を装ひながら注意深い目で正造を見た、この次の瞬間にどんなことが破裂して來るか待設けつゝ。彼女の口許には物凄しい微笑が漂うてゐた。

正造は其處の帳簿を手早く片づけた。さうして唯一言、

「茶談だよ。」と言つた。其片づけた帳簿の中に彼の銀行の通帳もあつた。小切手の帳面もあつた。待設けてゐた嵐が來ずに静かな沈黙の來たとお三千には一層氣味悪かつた。

お三千は正造の言葉に拗ねたやうな風を装うてついと立つて臺所に來たのであつた。

彼女は其處に來てほつと息をつくと同時に思ひ出したのは、一念の手紙をしまつて置いた手箱の事であつた。

「あの手箱！」

お三千には次の間の押入の中に錠を卸してしまつて置いた手箱が、もう既に正造の手に渡つてゐるものゝやうに思はれた。

「もうこれまでや。」

お三千は俄かに自分の心が落着くのを覺えた。——其瞬間お三千の頭にひらめいたもの

は妊娠といふことであつた。さうしてそれはどうしても正造の子であることを争ふことが出来なかつた。——彼女は悪びれもせず次の間に行つて押入を開けた。正造が自分の方を見てゐるかどうかわいにくらか氣になつたが、

「見てゐやはつてもだんない。」と思つた。さうしてゆつくりと錠をあけてしらべて見た。其手箱は曾て自分の見覚えのある通りの位置に其儘しまはれてあつた。上を縛つた紐のくり工合も正しく自分のくゝつたものに違ひなかつた。彼女は其儘もとの通り錠を卸し、押入を締めて臺所に戻つた。其序にちらと座敷の正造を見た。正造は此方に背を向けて何の氣もつかぬ様子であつた。

お三千が臺所に戻つた時に一人の使が其處に立つてゐた。それはお三千が待焦れてゐた或人からの使であつた。

お三千は其使の手から手紙を受取つた、大急ぎで讀んで行くうちに十圓紙幣二枚が其中

から出た。お三千は其紙幣を見ることを恐れるやうに急いでそれを巻き収めて懐に捻ぢ込んだ。それから紙の端に鉛筆で簡単な受取をしたゝめて、

「今は來客中、詳しいことはあとから申上ます。」と書き添へてそれを使に渡した。

「おほきに、御苦勞さん。」とお三千は其使の男の、嫌を取るやうに言つた。其使が歸るとすぐ、

「湯に行つて來よう。」と正造は其處に突立つてゐた。

「お湯どすか。へい。」とお三千は正造の手に手拭と石鹼を渡したが、其時正造の顔を見ようとはしなかつた。

正造が出て行つたあとでお三千の心は又俄に騒立ちはじめた。

「今の間に……」

お三千の心は又彼の押入の中の手箱の上に飛んだ。彼女は這るやうに次の間に行つて、

再び錠を開けて手箱を見た。それは何處までもとの通りに靜かに在つた。彼女は其手箱を取り出して其蓋を開けた。其中には二十通許りの一念の手紙が這入つてゐた。——これは破り棄て兼ねた一念の手紙を保存して置いたのであつた。——此手紙を保存して置くことの危険はかね／＼考へぬでもなかつたが、今迄それを思切つて破り棄てる氣になれなかつた。が、もう正造にあゝいふことを言はるゝやうになつた上は一刻も猶豫は出來ないとお三千は考へた。

お三千は其二十餘通の手紙を取り出して懐にねぢ込んだ。さうして押入はもとの通りに縮めて臺所に來た。

「さてこの手紙をどうしよう。」

お三千の考へは容易に定まらなかつた。ぼんやり臺所に突立つてゐたお三千の目には七輪が映つた。

「さうや、焼いてしまはう。」

さう考へたお三千の心は弾んだ。

「早く〜！ あの人が湯から歸らぬうちに！ お春（女中）が使から歸らぬうちに！」

お三千は懐に捻ぢ込んだ手紙を掴み出して七輪の中に横に曲げるやうにして入れた。マツチの火はそれに移された。青い火が燃え上らうとしては消えた。お三千の心は焦ら立つた。石油の入れてある罐のことが思ひ出されて庭の隅を見た。埃だらけになつてゐる罐の底には僅かに音がして石油が残つてゐた。お三千は跣足で庭に下りて其石油罐を取つた。其時わく〜と足の震へるのを覺えた。

石油が注がれて後ちに點ぜられた火は恐ろしく燃え上つた。大きな紙切れが黒く焦げた儘空中に舞ひ上つた。お三千は狼狽へて其處に在つた挿鉢で蔽ひをした。

一度空中へ舞ひ上つた大きな灰はやがてそろ〜と舞ひ降りた。それはお三千の眼に彼

女の罪惡を證明するものゝ如く氣味悪く映つた。彼女は手でそれを壓へようとしたが、生ある魔のやうに向うへ逃げた。彼女が再びそれを追うた時に、それは形の無い灰になつてしまつた。

挿鉢の蔽ひの下で赤い火が燃えた。其赤い火ももう消えかけたと思ふ時、お三千は電氣に打たれたやうにギョツとした。彼女は懐に手を遣つて見た。其處にはもう一本の手紙も無かつた。

彼女は狼狽へて挿鉢を上げようとした。其時には黒い灰になつた手紙の固まりが忽ち崩れて又舞ひ上らうとした。彼女ははたと又挿鉢を伏せた。

「つい他へ置いたかもしれへん。」

彼女は我を忘れて立ち上つた。其邊を探して見た。

「たしかに懐に入れた。一念はんの手紙と一緒に此七輪の中に入れてしまつたに相違無い。」

折角工面した二十圓が灰になつてしもた。」

一度失神しようとした彼女は又心を引きしめた。

「二十圓は又どうにかなるやらう。それよりも此始末を早くつけんならん。」

彼女は七輪を庭に持ち出した。さうして挿鉢の蓋を半分取りかけて其上に水をかけた。挿鉢も七輪も忽ち水で洗ひ流された。黒い水は大地を流れて垣根に沁み込んだ。形の無い二十圓を其中に見出し度いやうな心持がして、お三千は其大地にへばりついてゐる黒い灰を見やつた。

お三千の心は少し落着いた。

「一念はんの手紙さへなかつたら……。」

さういふ安心が第一に起つた。

「二十圓の方は又どうにかなるやらう。」

それは手紙に比べたら遙に容易な事だとお三千には思へた。お三千は足を拭うて臺所に上ると倒れるやうに其處に坐つた。

其時であつた、

「三千歳さん。」といふ男の聲が何處からともなく聞えたのは。お三千の心は休まる間もなく立上つた。聲のする方を尋ねるやうに其邊を見廻はした。いつもの窓の下に忍び顔に立つてゐるのは一念に相違なかつた。お三千は其方に駈けて行つた。

「一念はん。」

「三千歳さん。」

「今日は折りが悪い。あの人が湯に行つてもう歸つて來やはる時分どす。どうしまはう。」と彼女は立ちすくんだ。

「僕はもう決心して來た。」と一念は極めて落着いた聲で言つた。さうしてお三千の狼狽へ

てゐるのをさげすむやうに見遣つた。

お三千は兎も角も一念を此場から遠ざけるより外に途が無かつた。もう間もなく正造が湯から歸ることを一念に話した。一念は暫く此邊を散歩して、夕食後正造の歸るのを見届けて、再び窓のところに来ることを約束して立去つた。立去る時お三千は堅く一念の手を握りしめた。其處を立つて向うの人込みの中に紛れて行く一念の後ろ姿をお三千は淋しく淋しく見送つた。

正造は無事な顔をして歸つて來た。湯上りの光つてゐる廣い額は、いかにも豊かに美しくお三千にも見えた。晩食の膳の上には一本の銚子が置かれて、正造はお三千の酌で陶然として酔つたやうに見えた。

正造は小切手の事は一言も言はなかつた。唯だ他愛もない笑談を言つた。お三千は甘え

るやうにそれに答へた。其間にもお三千は外面を見た。漸く暮れて行く外面には一念らしい人影は見えなかつた。

正造は晩食を終ると三十分許り寝轉んでゐた。お三千は枕許に坐つてかゝる場合に此男の要求する情婦らしい言葉を話さねばならなかつた。其間にもお三千は外面を見た。外面の闇は漸く濃く濃くならうとしてゐた。この隠れ家らしい家にはまだ灯がともらうともしなかつた。

正造が此家を出た時分には大空には星の光が明るかつた。

「一念はん、こらへとくれやす、今迄何處を歩いといやしたんえ。」とお三千は正造を送り出した後に窓の所に現はれた一念の手をやさしく握つた。

「僕はもう餘程大膽になつて、最後の三十分許りは此家の垣の外の闇に立つてあの人の出

て行くのを待つてゐた。」と一念は考へ深く言つて、

「はやり僕の想像して居た通り三千歳さんは口でいふ程あの人を嫌つてゐないな。」
「又そんなことをお言ひやす。」

お三千の眼には又涙がたまつた。其涙は容易に一念の心を動かさなかつた。

「僕は愈々今日山を飛出した。僕は今日といふ今日愈々決心して来た。」

さう言つて一念は顔を上げた。

三千歳は一念が熱する程自分の冷やかになつて行くことを意識した。彼女は一念の言葉を聞き乍ら腹の子の事を考へてゐた。

五

荷車を引いてゐる男が泥の光つてゐる往來を縫ふやうにして通つてゐる。小女が荷車の

輪からはねる泥を逃げるやうにして、向うの人道からこつちの人道へ走つて来る。一念は其小女を見たことのある顔のやうに思つて凝視したが思ひ出せなかつた。其小女の走り去つたあとには雨が泥を躍らして降りそゞいでゐた。

此處を斯う歩いてゐるといふ外、どうするといふ定まつた考は一念に無かつた。

「いゝ景色だなあ。」といふ聲がふと耳許に聞えた。それは四條橋畔の煙雨に包まれた柳を見やりながら立ちどまつてゐる人の聲であつた。

突然後ろから一念の腰のあたりを突いたものがあつた。一間許りよろめいたが倒れはしなかつた。

「あぶない。氣をつけないか。」と嗚る聲がすぐあとから聞えた。三臺の車が威勢よく橋の上に續いた。一念は其あとを見送つて淋しく笑つた。

其時一念は向うから来る傘の中の白い顔に逢着して我を忘れて目を瞠つた。

「三千歳ではないか。」と思つてよく見るとさうではなかつた。

雨の中を當ても無く歩いてゐる一念は最前から何といふことなく疲労を感じてゐた。今
「三千歳ではあるまいか。」と疑つた瞬間、俄に心が引きしまつたやうに覺えたのも、其女
がお三千でなかつた失望にすぐ又もとの疲労に戻つた。

「やはり自分はこの女に逢ひ度いのだ。」

さう考へることが情けないやうでもあり満足なやうでもあつた。

きのふは天氣であつた。叡山を一氣に走り下つてお三千に逢つたと思ふと、丁度小寺が
来てゐて今湯に行つたところであると聞いたので、彼は時間をつぶす爲に當てもなく圓山
公園から高臺寺の邊をふらつた。それはかなり長い時間であつたが、それでも後ちにお
三千に逢へるといふ望みがあつた爲に、それ程に疲労を感じなかつた。今日此雨の中を歩
いてゐる時間はまだ昨日程長くはない。それでゐて疲労に堪へないやうに覺えたのは、其

のお三千に逢ふといふ望みが無い爲であつた。さうして其の望みはこちらから強ひて絶つ
てしまつたはのであつた。

「もうお前には二度と逢はん。」

自分はたしかにさう言つた。聲を荒らげてさう言つた。さうして自分が個條書きのやう
にして、三千歳に話さうと思ふことを思ひ出し、高臺寺の門のほとりの石に腰をかけ
て書きとめた紙——其紙と鉛筆とはそれを書く爲めに態々町迄買ひに行つた——を、

もう斯んなものも反故だ。

さう言つて自分は引き裂いた。さうしてそれを丸めて三千歳の額の邊に擲げつけた。そ
れ迄黙つて俯向いてゐた三千歳は其丸めた紙の當つた額を唯靜かに上げて、あきれたやう
な顔をして自分を見た。其目は乾いて口許は痙攣してゐた。自分は其まゝ其處を去るに忍
びぬやうな心持がした。何とか言つて三千歳から引きとめられたいと思つた。けれども三

千歳は黙つてゐた。愈々下駄を穿いて表に出かけた時に破裂したやうな三千歳の泣聲を自分は初めて聞いた。自分は其聲に立ちすくんだ。脚は俄に重くなつて闕の外に唯の一步を踏み出すことが困難であつた。が、今更立歸ることは又それ以上に苦痛であつた。自分は其重い脚を強ひて闕の外に運び出して後をも見ずに駆けつた。

もう二度と此家に來るものか。

強ひてさう考へることが重つ苦しく愉快であつた。……」

一念は其時の心持を考へ出して再び其言葉をくりかへして見た。それに拘らず今幻に見たお三千の顔が目の前にちらついてどうしても離れなかつた。一念の心はお三千の家に向つてゐた。併し足は反對の方向に進んだ。

雨の降る淋しい家にお三千はぼんやりと窓に靠れてゐた。遠い足音に一々耳を傾けたこ

とももう草臥れて根氣が盡きた。少し加減が悪いからとお春に布團を延べさせたが、臥せる氣になれなかつた。今の境界をどうしたらいいかと考へることよりも、何者か自分の心を引立てゝくれるものが欲しかつた。其時ふと思ひ出したのは昨日一念が自分の額に投げつけた彼の丸めた紙のことであつた。其時は唯腹立たしさに暫くは其紙を見るのも厭であつた。けれどもお春がそれを紙屑籠に入れようとした時にお三千は慌てゝとめた。それは入用のものだと言つてお春の手から受取つて帯の間に入れた。さうして寝る前にそれを取り出して切れぐゝになつてゐる紙の文字を聯絡も無く拾ひ讀みした。中には辛うじて意味を酌み取ることの出来る文字があつた。酌み取つた文句の意味はお三千から見ると大方は實行の出来ぬ空想であつた。自分の腹に其子を宿した小寺正造の許をさう容易に——一念が考へるやうに——離れることの出来るものでない、といふことをお三千は何よりも先に考へた。一念のみと作る世界、それがお三千には已に空想であつた。小寺正造とお腹の子

と自分とそれから一念と、それだけで作る世界がお三千の本當の世界であつた。それを破壊してかゝらうとする一念をお三千はどうしても心から理解することが出来なかつた。さういふ考から出發してゐる其の切れぐの紙の中の文句も、お三千はそれ程重きを置いて見ることが出来なかつたが、一念が引きさいて自分になげつけた其切れぐの紙片は唯なつかしかつた。お三千はいつ迄もそれを反故にすることが出来ないで、丸めたまゝでしまつて置いた。さうしてそれを取り出して見ることが、今の淋しい心を慰める唯一のものであることに氣がついた。

それを取り出したお三千は暫く丸まつた儘で眺めてゐた。昨日之を自分の額に擲げつけた時の一念の恐ろしい顔が思ひ出された。

「なんぼ一念はんが怒らはつても自分の心さへ變らなんだら……」

お三千はさう考へた時に、自分で自分に同情した甘い涙が臉を傳うてにじみ出た。

六

お三千の唯ぼんやりとして過ごす日が續いた。一念からは何の便りも無かつた。

「一念はんどうしやはつたんやらう。」

お三千の不安はだん／＼強くなつて來た。それとなく心當りを問合せて見たが何處にも居なかつた。

「一念はんもあんまり得手勝手やわ。」

お三千は腹を立てゝも見た。あんな口争ひは今迄でも珍らしいことでは、い、それに今度に限つて、人の言ひ譯も聞かずに飛び出して、それから一言の便りもせず、人に心配ばかりさすといふのは餘り無情な仕打ちだと怨んでも見た。

二人が逢うた時の喜びはいつも湧き立つ泉のやうで止め度が無い。其悦びは手を握り合

つても接吻し合つても抱擁し合つてもなほ現はし盡すことの出来ないものである。が、其悦びが少しでも満足されかけると、そこに影のやうに現はれて来るものがある。一念は口をつむつてちつとお三千の顔を見る。お三千は涙ぐんで一念の顔を見かへす。

或時一念は思ひ餘つてお三千に言つた。

「三千歳さん、何故もつと僕を可愛がつてくれない。僕はもつとく可愛がつてもらは度
す。」

此時一念の眼には涙さへ光つてゐた。お三千はかねく自分が瀧のやうに涙を流す時でも、一念の眼に涙を見出すことは滅多にないと思つてゐた。お三千は、

「男は泣かんものやろか。」とよく其乾いた眼を不思議さうに見るのであつた。が、此時は珍らしく平常乾いてゐる男の眼に涙を見出して、お三千の心は油に濡れた髪のやうに濕うた。さうして其眼からは止處なく涙が流れた。

「一念はん、わてこないに可愛がつてあげてるのに。なえんでそない厭味をお言ひるのえ。此上可愛がるにも可愛がりやうがあらへんわ。」

さう言つて一念を柔かく抱きしめた。が、一時間も経たない内に今度はお三千の方から、
「一念はん、なえんであんたあてをもつと可愛がつておくれやへんのやろ。あて、もつともつと可愛がつてほしいわ。」

お三千は其時の事を考へ出してゐた。

「あの時も一念はんは、到頭しまひに怒らはつた。あてが優しい言へば言ふ程つくし
て、しまひには手を障るのも厭さうにしやはつたよつて、あても亦つんと怒つて見せた。さ
うすると一念はんは自分の背中を撫せて、

又泣くの。いやになつてしまふなあ。すぐ泣いておどかすのなもの。

さう言うて機嫌を取つてくれはつた。其時はまゝにならんのがかなしうて二人抱き合

て暫く泣いた。顔を上げて見合うた時にはもう一念はんの眼には涙は無かつたが、それでも聲を出して泣いてゐやはつたのはたしかに聞いた。そんなこともあつたのに、今度は自分獨り勝手に怒つて、勝手に飛出して、三日も四日もたよりせんと、どこにどうしてゐやはるのやらう。こない人に心配をさして。一念はんが其氣なら、あてかて其氣になつてやる。三日も四日もたよりせんと氣がすんで居るのが第一をかしい。なんぼ腹が立つて飛出しても辛抱が出来んと便りをするのが人情やないか。辛抱が出来るやうになつたのは、もう水臭うならはつたんや。厭氣がさしかけたんや。一寸したことをいひがりにして逃げるつもりやのやらう。そんならこつちやも其氣になつてやる。こつちやからももう何處にも聞き合はしたりするもんか。ほつとかう。さう極めると却つて氣持がさつぱりした。きれいさつぱりと心を持直して小寺の妾で無事に暮らして行かう。」

お三千は平生餘り眺めもしない大空を見詰めた。白い雲の晴れた空に流れて行くのが今

日に限つて心あるものゝやうに思はれて、涙ぐましいやうな親しさを覺えた。

「まあなえんでこないに美しい空やのやらう。晴れ渡つた空が丁度今のあての心のやうやわ。もう今迄の長い／＼苦勞を忘れよう。あゝもう氣がすつとした。夢がさめたやうや。」

お三千は喩へやうの無い静かさを覺えて、いつまでも唯動いてゐる白雲を眺めてゐた。が何となく淋しさに堪へなくなつて來て又涙が止度も無く流れ出した。

「一念はんがそんな心にならつたんなら、いつそ死んでしまつてやるか。あての死んだ死骸を見たら、一念はんは屹度泣かはるにきまつてゐる。」

お三千は蠟細工のやうに青白くなつて、しかも美しさを失はぬやうに死んでゐる自分の死骸を想像して見て、さうして其死骸に取りついて泣き伏して居る一念を描いて見た。涙は益々臉をあふれ出て、ないじやくりをさへ始めるのであつた。

お三千は立ち上つて戸棚の中から裏打ちをした反故を取り出した。鉛筆で書きしるした

一念の文字が怨みがましく散見された。お三千はその文字から一念の怨みを讀むよりも、これを丹念に接ぎ合はして裏打ちした自分に同情して又甘い涙を誘うた。一念が其紙を引き裂いて自分に擲げつけた時は、こま／＼に引き割いたやうに思はれたのであつたが、それを接ぎ合はして見ると、それ程こま／＼になつてゐないで、僅に四つか五つの大きな切れになつてゐて、はし／＼の小切れを集め合はせても、皆で七つか八つに破れてゐるばかりであることが判つた。

「一念はんはつぱりこま／＼ちやによう破らはらなんだ。あない怒らはつたやうに見えても、お腹の底からほんまに怒ることが出来なんだのや。」

お三千はさう考へ乍ら丹念に裏打をして見たのであつた。

お三千は今それを眺めながら、無理に破つた鋸目のやうになつてゐる紙の接ぎ目をぼんやりと見詰めてゐた。

其時であつた。滅多に鳴つたことのない電話のベルのけた／＼ましく鳴つたのは。其ベルの響きはお三千の胸の底の底迄響いた。お三千は弾かれたやうに立ち上つて電話口に立つた。

「もし／＼……」と呼ぶ聲は疑もなく一念の聲であつた。

「もし／＼一念はん。あてお三千どす。」とお三千の聲は震へた。

「僕は我慢がしきれなくて到頭此電話をかけた。」

一念の聲はお三千の肺腑にしみて響いた。お三千は受話器を耳に當てたま／＼電話口から顔を離して涙をハラ／＼と頬の上に落した。返事の言葉が容易に出なかつた。さうして僅に斯う答へた。

「それなら……」

あとの言葉は喉に詰まつて出なかつた。又あとの言葉をどういふ風に言ふ積りであつた

のか自分でも判らなかつた。唯一念がさういふ氣でゐてくれたことは、豫期してゐたやうでありながらも、亦意外の事のやうに思へて嬉しかつた。

「一念はん、今何處にお居やす。あれからどうしといやしたのえ。」

それには一念の方が答へなかつた。

「三千歳さん、これからすぐ行つてもいいかい。」

「だんないよつて、すぐ來とくれやす。すぐ來とくれやすや。」

電話口から一念を去らすことは、又其まゝ何處かに行つてしまふのではないかといふやうに、お三千には不安に思へてたまらなかつた。一念が電話口から去つた後も尙ほお三千は受話器を堅く握りしめて耳に當てゝゐた。

お三千は漸く受話器を耳から離して尙ほ暫く電話の前にぼんやりと突立つてゐた。

先刻から錢湯に出掛けようと思ひながらも、氣が進まずにぐづ／＼して居た事を思ひ出した。急いで出掛けて來ようかと思つた。が若し其間に一念が來たら、と思ふとどうしても出掛ける氣になれなかつた。

「今の間にお湯を遣うとこかしらん。」

お三千は臺所に行つて釜の蓋を取つて見た。水は一杯汲み込んであつたが沸つてはゐなかつた。

「お春どん。」と呼んで見たが返事が無かつた。

「お春どん。」と今一度大きな聲をして見たがまだ返事が無かつた。

お三千は竈の下を覗いて見た。其處には薪がチャンと組み合はせて其間に焚き付けが置かれてゐた。

お三千は自分でマッチを取つて焚き付けに火を移した。火は心持よく燃え上つた。

臺所で薪の燃える音の聞えてゐる時に、お三千はもう箒を持つて座敷を掃いてゐた。ゆるんでゐた自分の體のバネが俄に引きしまつたやうにお三千には思へるのであつた。

チリと音がしたのは又電話のベルが鳴つたではないかと箒の手をとめて其方を見た。さうではなかつたらしいので再び箒を動かし始めたが、何となく不安の氣が胸を打つた。「どうしたのであらう。又一念はんからではなからうか。」

再び電話の方を見返した時にベルは又三四度チリ／＼と鳴つた。が、それも長く續かずに止んでしまつた。

お三千は電話口に立つて、

「もし／＼。」と呼んで見た。が、森閑として返辭が無かつた。

掃除をすませてから湯を遣つたお三千は鏡臺の前に坐つて化粧をした。此の三四日此鏡

臺の前に坐る度に、鏡の中に影の薄い自分の顔を見出しては目をそむけたお三千が、今は生き／＼とした瞳にちつと鏡を見詰めて、少し血の氣の少ないと思ふ顔に大きな白粉の刷毛を當てた。

口に當てた紅粉の茶碗を取つたあとには、紅梅の咲いたやうな眞赤な唇が誇りがに映つてゐた。

チャンと身じまひをもすませてしまつたお三千は、しようさへ思へば僅の時間でこんなに早く出来るものかと自分のしたことを不思議にさへ思つた。が、其頃から一念の來るの、遅いのが氣になり始めた。

「一念はんは何處から電話をかけはつたのやらう、聞いとくとよかつた。」
さう思つて電話を見た。電話は静まり返つてゐた。

「もう來やはるやらう。」

お三千は何度も立上つて外面を見た。

一臺の車が此方をさして來るのを見るとそれは小寺であつた。お三千は覺えず窓を離れて二三足座敷を歩いた。

「旦那はんが來やはつた。折りが悪い。どうしたらよろしいやらう。」

けれどもどうすることも出來なかつた。お三千は顛倒した心で小寺を迎へるより外に仕様がなかつた。

「おや大變おめかしで、お出掛けかい。」と小寺は機嫌よさうにお三千を見た。

「へえ。」とお三千は煮え切らぬ返事をして青白い顔をして其處に突立つてゐた。

小寺は今日は長くはゐないと言つた。それでも枕を出させ、其處に寝轉んで、お三千の

顔を見乍ら暫く話した。

子供の出來るといふ事を小寺の母親が知つてゐるらしいといふことなども話した。母親の頑固に當惑してゐるやうな容子も見えた。

お三千は青い顔をして黙り勝てゐた。

「一念はんどうしやはつたんやらう。表い來やはつて、小寺がゐるので又怒つて行つてしまはゝつたんやらうか。」

さう考へると立つても居てもゐられないやうな心持がした。

ゴソといふ物音にも耳を傾け乍ら小寺の前では素振りにも出すまいとつとめた。

小寺の前を離れて臺所の方に来るとお三千はそつと下駄を穿いて表の方を見廻つたり、人も來ないのに誰か來たやうな素振りをして表に出て見たりした。が、一念の姿は何處にも見えなかつた。

小寺の前に戻つたお三千は唯口先だけで小寺の話に返事をしてゐた。が、其中で自分の腹に在る子供の話になると、いつの間にか耳を傾けてゐることに自分で気がついた。

「今の話の間一念はんのことをつい忘れて居た。今の中に一念はんは來やはらせなんだか。」

さう思ふと又用事にかこつけて立上つて表や裏を探しに出て見た。

やはり一念はゐなかつた。

小寺は車を呼ばせて漸く歸つて行つた。お三千は蘇生したやうに部屋中を歩き廻つた。何度も電話の下に立つたが、扱てどうすることも出来なかつた。

又表に出て見た。

此處を出て何處へ探しに行くといふ目當もなかつた。青白いお三千の顔は唯ちつと往來

を見詰めた。

其時、

「三千歳さん。」といふ一念の聲が、たしかにお三千の耳に響いた。お三千は物に打たれたやうに驚き乍ら四邊を見廻した。が、何處にも一念の姿は見えなかつた。

お三千は又裏の方へも廻つて見た。が、矢張り居なかつた。

「三千歳さん。」といふ一念の聲が再び聞えた。それはたしかに表の方から聞えた。お三千は氣違のやうに其の聲の方へ走つて行つた。

其處には一念が立つてゐた。其服装も容子も四日前と同じことであつた。ちつとお三千を見据ゑた其顔は見違へるやうに衰へてゐた。

「一念はん……………」

お三千はそれ以上何とも言はなかつた。唯黙つて一念の袖を取つて引いた。此袖を離し

たら又何處かへ逃げて行つてしまふだらうかを恐れるやうに。

一念はお三千の眞面目の顔をちつと見た。其の口許には微かな痙攣を起しつゝ、恐ろしい眼で一念を見詰めてゐるお三千の顔をちつと見た。

お三千は又三四日の間に著しく衰へてゐる一念の顔を見つめた。

お三千の引いてゐる袖を一念は拂はうともしなかつた。一念は引かれるまゝにお三千のあとについて家に這入りかけたが、又立ちどまつた。

「一念はん。なえんでお這入りん。」とお三千は喉からしぼり出すやうな聲で言つた。一念はそれには答へなかつた。が、又お三千に引かるゝ儘に歩を移した。

座敷に上つた二人は暫く黙つて向き合つてゐた。

「なえんで………」とお三千は話し出さうとして遂に泣き伏してしまつた。

一念は暫くお三千の體に手を觸れようとしなかつた。乾いた眼でちつとお三千を見下ろ

してゐた。

「一念はん、なえんであてをお嫌ひるの。」

顔を上げたお三千は強く一念の手を握つて自分の體を一念の方ににじり寄せた。尙ほ一念の固くなつて坐つてゐるのをもどかしさうに、自分の體を其膝の上に載せかけるやうにして、ひしと一念の體をだきしめた。

漸く一念の手は柔かくお三千の襟の上に落ちた。

「僕はどうしたらいいのだらう。」

さう言つて一念はお三千を強く抱き締めた。其眼からは始めて熱い涙が迸り出た。

「いつまでも斯うやつてゐておくれやす。いつまでもく。」とお三千は聲をしぼるやうにして言つた。

「いつまでも斯うやつて、……」と一念は心の中でそのお三千の言葉を繰り返しつゝ堅く

抱きしめてゐた手をゆるめようとした。

「離してはいや。いつまでも斯うやつて——。」とお三千は又體をすりよせるやうに言つた。一念の手は再び固くお三千を抱きしめてゐた。

「三千歳さん、僕はさつき三度迄此處の窓の下に來たんだよ。さうして立聞きしたんだよ。」

一念は急に立上つた。併て、引据ゑたお三千の力に壓されて又どかと坐つた。

「一念はん、氣を落つけとくれやす。あんた此四日間何處におゐやした。」

お三千の顔はもとの青さめた色に戻つてきつと一念を見た。

「四日間何處におゐやした。さうや、わてそれが一番聞き度かつた。何處におゐやしたのえ。」

「なえんでお言ひんのえ。お隠しるのえ。四日の間にそんなにおやつれやしたのはどう

いふわけです。聞かしとくれやす。」

一念の眼からは又涙が流れはじめた。

「一念はん氣を落つけとくれやすや。あてが、こないに苦勞してるのが一念はんに判らんのやろか。何も彼も一念はんが土臺どたいになつて斯うやつて小寺の前も取締うて辛抱してゐるのやおへんか。何も彼も一念はんの爲やおへんか。」

「又同じことを繰返す。」と一念の心はいらだちはじめた。

七

それは嵐の日であつた。大原から横河に登るのには仰木越に出て、それから僅に樵の通る細道を唄傳ひに中堂の方に出るのであるが、其樵さへ通はぬ嵐の日に、一人の青年は其岨道を辿つて中堂の方へ登つて行つた。それは一念であつた。

一念は傘も持たずにゐた。お三千に借りた傘はもう山に登らぬ前に吹き破られてしまつてゐた。一念は其竹の柄だけを杖にして山に登つたが、それも樹につかまつて大きな嵐をこらへるはずみに谷間につい落してしまつた。

雨は一念の頭から降りそゞいだ。時には石を擲げつけるやうに正面から顔を叩いた。

山藤がちぎれて飛びさうにあふられ乍ら低い樹にしがみついてゐた。

雲が眼の前を飛んだ。

今度は足場を失つて吹き飛ばされたかと思ふことも度々あつた。

一匹も飛ぶ鳥が無かつた。

鳥どころか其處に嵐にもめてゐる樹木の外、何ものも眼に入るものはなかつた。天も地も山の骨もなかつた。唯動き躍る樹木ばかりがあつた。

一念は此路を猿の様に大原に駆け降りたことも度々であつた。たとひ樵が路を踏み違へ

ても自分は踏み迷ふやうなことはないと思つた。嵐に對する恐怖が全身に入みる時にも、此岨道は自分の爲に出来てゐるものやうに思ふと、そこに一つの安心を見出すことが出来た。

「自分の所に歸るのだ。」といふやうな考が頭の中を往來した。

「こんな唯の雑木山。」と考へて「早く此處を出てしまひ度い。此山を下りてしまひ度い。」と考へた、其山に今自分は歸りつゝある。さうして何となく自分の所に歸るのだといふ風に感ずることを不思議なやうにも腑甲斐無いやうにも思つたが、やはり、

「自分の所に歸るのだ。」といふ考は拭ひ去ることが出来なかつた。たとひ暴風雨が天地を塗りつぶし山骨を隠してしまつても、其嵐にもまれてゐる一草一木は自分に親しみのあるものゝやうな感じを取り去ることが出来なかつた。

「此の岨道を猿のやうに駆け下りて、あの大原の百姓家へ行つた時。」と一念はお三千と百

姓家で逢つた當時のことを思ひ出した。

「それは三千院の懺法の修される日であつた。」といふ事もまさ／＼と目の前に浮び出た。それは遠い／＼昔の事のやうに思へた。

「それが遠い昔の事のやうに思へるのは不思議は無い。此間三千歳の許を飛び出して四日間放浪した間のこと——其四日間の事は三千歳には到頭話さなかつた。あとから手紙で必ず話すと約束した。——是がもう遠い／＼昔の事のやうに思へる。いや、それどころか。其後大膽にも二日間人目を忍んで三千歳のあの家に隠れて居つたことすら、それは今日のさつき迄の事であつたのであるが、それすらもう遠い／＼昔の事のやうに思へる。」

一念はさう考へて嵐の中に突立つた自分の足がびたと止まつて一步も先へ進まぬやうな心持がした。お三千のあの家に此儘飛んで歸り度いやうな心持がした。

「馬鹿な。」と一念は自分を叱つた。

「三千歳は何度も泣いて頼んだ、其の三千歳のいふ事を聴いて、自分は一先づ今山に歸るところではないか。

又逢ひに來とくれやすや、明日にも、明後日あさってにも。けど今日は和尚さんの所に歸つておくれやす。どうぞお寺をしくじらんやうにしとくれやす。この間のやうに譯の判らんところをうろついて體を悪うせんやうにしとくれやす。

三千歳はくり返してさう言つた。いつの間にか自分も其心持になつてゐた。風の添うた雨の中を自分は三千歳を怨まずに出た。二日間自分を、鶏が卵を暖めるやうに、暖めかばうてくれた其情にほだされて、自分は三千歳のいふが儘になつた。……女の大膽さといふものを自分は始めて知つた。其の二日目に小寺の來た時自分は狼狽したが、三千歳は落着いてゐた。さうして同じ家の中に隠し通した。それを思ひ出してもいゝ心持はしないが、捨身でかゝつた三千歳のあの場合の情に感奮して、自分は決してもう此女を怨むまい

と思つた。あとで其事を三千歳に話したら、三千歳は淋しく微笑しながら自分の顔を見つめて、

さういふ口の下からすぐ又疑つたり怨んだりおしやすやろ。

と言つた。二日間も彼の女の暖みにくるまれ、彼の女の香にひたされた其の時の自分は、決してそんな事はない、と思つたが、こゝに斯うやつて冷めたい嵐の中に突立つてゐる今は、自分を平気で送り出した彼女の顔の中に何處やら物に飽いた、草臥れた色を読んだことを物足りなく思ふやうになる。もう自分は彼女を疑つてゐるのだ。怨んでゐるのだ。……あゝもう下らんことは考へまい。自分は今山に歸るのではないか。」

一念は吹荒るゝ嵐に抵抗して、全身の力を鼓舞して、此艱道を突進むことに強ひて一つの満足を覺えようとした。

―手足のところ／＼に赤い血さへにじんだ。

嵐は又樹木を吹きゆるがして、一念の肉塊さへ小石のやうに谷底へ吹き落さうとした。

一念は大地を踏みしめて嵐にゆらぐ小さい樹を両手にしかと握つてゐた。

横河の和尚さんはいつもの通り座右に往生要集を備へてゐた。今眼鏡を外して其お經の上に置いて、両手で落窪んだ老の眼を二三度くり／＼と撫でた。其手を除けた時に其處に坐つてゐる濡れそぼつた、髯のしよぼ／＼と延びた一人の若い男を見出した。それは一念であつた。

八

三千歳さん。山の上も急に夏らしい心持がする。

其後手紙を書かうかと思つたことも何度だか判らない。

今日も何遍手紙を書かうと思つたか判らない。

何も書くことが無い。

僕の頭は空虚だ。何處を探しても何も無い。

三千歳さん、あなたの家から眺める此山は大方毎日濃い霞に包まれてゐるでせう。

三千歳さん、僕は今度の事以來、あなたの其日々々の生活が今迄よりもはつきり判つたのがなか／＼辛い。朝布団の中で眼が覺めると、僕の目の前に現はれて來るのは三千歳さんの生活だ。僕から離れてゐる三千歳さんの生活はそれがはつきり想像がつけばつく程僕には辛い。どうかして今迄のやうに、唯何とも判らぬものであり度いと思ふが、もうそれは取り返しがつかぬ。小寺がこんな咳拂ひをする。三千歳さんが斯ういふ足音をさす。小寺の前にはこんな煙草盆が出される。こんな湯呑が置かれる。それ等の事が一々手に取るやうに想像がつく。

「小寺の家に居て、そこをすいてゐると思ふとくれやすな。お三千の自身の家をすいてると思ふとくれやす。」と三千歳さんは言つた。が、僕にはさうは思へない。小寺が三千歳さんを圍ふ爲めに拵へた家は小寺の家に相違無い。そこを好いてゐる三千歳さんは小寺の家を好いてゐるではないか。

もうよさう。いつの間にか僕は愚痴を言つてゐた。僕はもう三千歳さんを怨まない約束であつたのに。たとひ心で怨んでも口へは出さぬ覺悟であつたのに。

今臺所に行つて見たら例の爺やが京へ下りると言つた。こんな好便は又と得にくい。

まだ書かねばならぬことがあるやうな氣がする。が、何も出て來ない。其後一度も便りをせんのが氣になるので、取り敢へずこれだけで爺やに渡すことにする。

三千歳さん、僕は自分が判らない。僕は近いうち又た三千歳さんに逢ひに此山を降りるかもしれない。

九

一念はん、こちらからお手紙出してえゝのやらわるいのやら、氣ばかりもんで居ました。嬉しうおした、ようよこしておくれやした。けれども随分待つて。五日間待つた苦し。

爺やを待たしてゐて書く手紙故しどろもどろどすやろ。

今小寺は居ません。それが何より。

嬉しい〜お手紙と心も體も顛へながら讀んでゐるのに、しまひの方に厭味。心の中で怨んでも口には出さぬ覺悟とやら。

あれから明けても暮れても、私は何も手につかず、唯一念はんのことばかり考へて居ました。あの恐ろしかつた大嵐、あんなことなら、どうしてももう一日泊めたものを、とも思ふし、又嵐を氣遣うて小寺が來たことを思ふと、泊めでよかつたと思ふし。

あれから今日迄何のお便りもないのはどうしたのか、怪我でもあつたのではないか、お寺の方の都合が悪いのではないかと。

あんたを山へ歸したあての心を察しとくれやす。あの時一念はんは、手放して歸すあてが水臭いとお思ひやしたろ。それも決して無理とは思ひません。けれども山へお歸りる一念はんよりも、送り歸すあての方が、あの時どれ程辛かつたか。

もう何もいふまい。私の心は一念はんに判つてゐる筈だ。決して判らん譯は無い。判つてゐるとも。

一念はんが無うては生きとれんお三千、お三千が無うては生きとれん一念はん、やない

のどすか。

一念はん。明日にも機きがあつたら來とくれやす。今夜にも。

あんまり爺やさんを待たすのもと思ひ、これにて。

一念はん、もう決して此お三千の心を疑はずに、可愛がつておくれやすや。可愛がつてくれはらなんだら怒る。怨む。

三 千

一念様

十

「こゝはもう叡山ではない。比良の續きになる。」と一念は言つた。

「さうどすか。」とお三千は答へた。

「よく三千歳さんは草臥れないね。三千歳さんの弱い足でこんなに歩ける譯が無いのに。全く三千歳さんはどうかしてゐる。」と一念はお三千を見た。

「さうどすやろか。」とお三千はかすかにほゝゑんだ。

そこには壊れた炭竈があつた。急な山の傾斜が三方から此處に落合つて、此處から又別の傾斜になつて、遠く麓に流れてゐることが二人の目に明かに映つた。

「こんなに登つて來たのだらうか。」と一念は其遙かな麓を見下ろした。人に逢はぬ處くと志して、繊弱い女を連れて、いつの間にか斯んなに山深く分け入つたといふことが自分ながら不思議なことやうに思はれた。

「炭竈のあとゝいふものは二十年や三十年で無くなつてしまふものではない。」といふことを一念は寺男の話に聞いたことがあつた。一度炭竈を其處に築くには、遠くから石を運んで來て積み重ねたり、土で丸く屋根を塗り固めたりすることが容易な勞力ではないので

あるが、其屋根がごぼと中に落込んで、壊れた獨體のやうになつてしまふと、此自然の儘の深山の地上に、其廢墟のあとのあるといふことが少しも他の煩ひとならず、なまじひそれを取除けるといふことは無用な手数になるばかりであるから、其自然に打棄てられたままの炭竈は數十年の間——雨や嵐が其の塗り固めた土を壊し、積み重ねた石を崩壊し終る迄——跡をとどめて残つてゐるものであるさうな。

明け暮れ見慣れてゐる山であつても、それがもう叡山を離れて比良の山つゞきであると思ふと、殊に、これは叡山では見たことのない炭竈などが目に入ると、一念は何となく遠く住居を離れた心持がして、確とお三千の手を取つた。

炭竈の傍らには蕨が老けてゐた。頭の白い小鳥が一羽おびえたやうに其處に降りたと思ふと二三度首を動かしてあたりを見廻した末、足をかゞめて用意してゐたが、忽ち向うの森へ飛び去つた。鳶か鷹か一羽の鳥が高く大空に舞つてゐた。

二人は道傍の草の上に腰を下ろして休んだ。

「もう何時だらう。」と一念は山の間の空を見上げた。

「丁度お午頃やろなあ。」とお三千は足許を流れてゐる水を見た。麓の方では此水で水車を廻して米を搗いたり、器械を据ゑて製材をしたりしてゐたのを見たが、此處ではまだ土を濡らし草を浸して僅に流れを作つてゐるに過ぎなかつた。その叢には虎杖が林のやうに突立つてゐた。

「道理で腹が空いたやうに思つた。食べようではないか。」と一念は手に提げてゐたハンケチ包を膝の上に置いて其包を解いた。其中には餡餅が這入つて居た。

「あて食べたうない。あんたおあがりやす。」とお三千は其ひからびたやうな餅を見て眉根をひそめ乍ら、渴いてゐる喉に乏しい唾を呑み込んだ。

「此水飲んでだんないやろか。」

お三千は虎杖の根を走り出て細かい砂の上を流れてゐる水をなつかしさうに見た。
「いゝだらう。清水だもの。」と一念は餅を口に入れた儘答へた。

立上つて片足の草履を水に浸し乍ら、腰を屈めて両手に水をすくふお三千の姿を一念はぢつと見てゐた。顔をからげた下には美しい花模様の長襦袢が流れてゐた。袂を帯にはさんで差出した両手は白く袖口から抜出て、砂上を走つてゐる水は共お三千の兩掌の上に溜つては親指を越して溢れてゐた。

お三千は暫く其水を眺めてゐたが、遂にそれに口をつけずに止めた。

此日お三千は朝早く坂本迄來た。お三千を下ろした自動車は過分の祝儀を握つた運轉手に操られて飛ぶやうに京都に歸つた。其自動車が逢坂山を越える頃に一念は横河を下りた。二人は二臺の車を備うて仰木村迄行つた。車を乗り捨てた二人は山道にかゝつた。

「人に逢はぬ處に行かう。」と一念は言つた。

「行きまほ。」とお三千は答へた。

何處へ行つても人に出逢つた。よく斯んな處に人が居るものと驚かれた。

「もう此の人が最後だらう。もう此奥に人はゐないだらう。」と考へて尙ほ登つて行くと、そこに又人家があつた。

「此邊の人は何をしてゐるのだらう。獵師だらうか。百姓だらうか。」と一念は其一軒家を不思議さうに見た。

何度も同じことが繰り返された。もう愈々人氣が絶えたと思ふと、猿とも判かぬやうな一人の山男が峯傳ひに現はれた。

「もう此處迄來たら人は居ないだらう。」

一念は壞れた炭竈を中心にして其邊を見廻して見た。誠にもう人氣は無ささうに思はれ

た。炭籠のほとりに老けた藤も、叢に林立してゐる虎杖も全く人界を離れた清淨無垢の草木のやうに思へた。

「三千歳さん、よく此處迄歩けたねえ。僕は三千歳さんの足のことも氣にならないではなかつたが、兎も角人のゐない處まで行かうと思つて、唯一息に此處迄來てしまつた。」

一念は優しく言つてお三千の顔をのぞき込むやうにした。

「あて、ちつとも草臥れしまへん。一念はんこそお草臥れやしたろ。横河を下りてそれから又こないに山登りをして。」

「僕なんか山猿なんだもの、山の登り下りは平つたい道を歩くより樂だ。」

一念は快活に笑つたが、其笑はすぐ消えてしまつた。

「三千歳さん子供の事を思はない？」

お三千の子供はもう數へ歳二つになつてゐた。

「さへ。」

お三千の返事には力が無かつた。

「子供のお父さんの事は？」

「そんなこと言はんといとおくれやす。あて知りまへんわ。」

お三千はあわてるやうに一念の言葉におつかぶせて言つた。

「それでも三千歳さんの可愛い子供のお父さんではないの。」

「もうそないなこと止めておくれやす。そないなこと言ひたさに此の山の上までおいやしたんか。あて何も喧嘩しに來たんやおへんえ。」

お三千の顔は袂の中に埋められた。泣き聲は四邊を憚らず外に洩れた。袂の外に現はれてゐる耳は眞赤に染まつた。

「また怒つたの？」と一念は當惑したやうに言つた。「さあ怒らずに機嫌をおなほしなさい。」

もう子供の事も、子供のお父さんの事も言はぬことにせう。……本當だ。此處迄遙々誰が喧嘩をしに来るものか。誰も居ない明るい天日の下で僕は思ふ存分三千歳さんを可愛がつてやり度いと思つて來たのだもの。」

一念はお三千を引寄せて其首を抱へるやうにして接吻した。お三千が立上つたので一念も立上つた。お三千が歩き出したので一念も歩き出した、一念の左の手はお三千の首にからまつた儘で。

お三千は頭を一念の肩にもたすやうにした。二人の唇は再び接した。歩く度に齒と齒との幽かに觸れて鳴る音が二人には琥珀の響のやうに聞えた。

「死にまほ。」とお三千は立ちどまつて輝いた顔を上げて一念を見た。

「死なう。」と一念も明るい目を睜つてお三千を見下ろした。

「さあ早う。」とお三千は迫つた。

「よし。」と一念は力強くお三千の手を握つて大きな呼吸をし乍ら二三足大地を踏みしめて歩いた。お三千は引きずられるやうに其方に跟いて行つた。

二人は壊れた炭竈の下を離れて谷河沿ひに二十間も登つた時に又そこに別の炭竈を見出した。其炭竈は丸い屋根が少しも傷はれずにゐて其傍には薪の山が積まれてあつた。彼等二人が其處に行つた時に、其薪の山の蔭から一人の男が現はれた。

「まだ人が居た。」と二人は同時に考へて覺えず立ちどまつて其男を凝視した。

五十を過ぎた人の善さ・うな顔をした男は、二人よりもより以上に驚いた顔をして此方を見た。

二人は其儘足を返して籠迄駆け降り度いやうな心持がした。けれども此場合どうすることも出来なかつた。知らぬ風をして此男の傍を通過して奥深く入るといふことは門番の傍

を黙つて通るよりもつと難か^身しいことのやうに思はれた。谷は恰も此の男を門番としてゐるかのやうに、此處から折れ曲つて更に奥深く威儀を整へて展開してゐた。

「仰木越に出るのは斯う行つていゝのですか。」と一念は此場を繕ふ爲めに出任せの事を言つた。

「仰木越ですか。」と男は半ば謎が解けたやうな、半ば驚き呆れたやうな顔をして、少し笑ひを含みながら答へた。

「仰木越はあんた方角が違ひますがな。全體何處からお上りやした。」

「仰木村から……」

「そらえらい方角違ひや。仰木越なら仰木村から大きな路を眞直ぐに登つて行かはつた方がよかつたにあ、途中から右手へ外れやはつたんやらう。」

さう言つて男はお三千の風態を異様の眼を輝かして見た。再び疑惑の表情は其顔面の單

純な大きな皺に現はれた。

「そないな恰好をしてようこゝ迄來やはつたもんや。まあ其處に私の小屋があるさかい、そこ迄來てお茶など飲んで休みなはらんか。」

男は二人の風態から尙ほ其意味を讀まうとするやうにしげ／＼と眺めてゐたが、やがて先に立つて自分の小屋の方に進んで行つた。

一念もお三千も此際此男の言葉に負くことが出來ないやうな心持がして、小さくなつて其あとに跟いて行つた。固く手を握り合つて。

小屋は大地に柱を埋めた掘立小屋であつた。壁は表から小さく板を打つけた許りで土は少しも塗つてなかつた。屋根も同じやうな板が並べてあつてそれが大きな葛で飛ばぬやうに縛りつけてあつた。よく見ると釘は殆ど遣つてなく何處も彼處も葛で縛つてあつた。固より天井は無く、圍爐裏の上の屋根裏は煤で眞黒に染まつてゐた。

圍爐裏はかなり大きなもので、梁から下つてゐる自在鍵は矢張り葛で出来てゐた。其自在鍵も、先にぶら下つてゐる土瓶も、土瓶の柄も、同じやうな色に煤に染まつて黒光りに光つてゐた。

二人は暫く其小屋の口に立つて這入り兼ねてゐたが、男は無造作に、

「おはひりやすな。」と言つた。其特別に女の聲がして、

「汚いことですけど、這入つとくれやすな。」と言つた。

よく見ると圍爐裏の向うに一人の女がものも敷かずに寝てゐた。唯腰の處に薄い布團を掛けてゐた。

お三千は其女を見ておびえた。一度這入りかけたのが又立止まつた。

唯此際お三千の心をそゝつたのは其自在鍵に下つてゐる土瓶であつた。其中に沸かされてゐる茶の事を思ふと何を棄てゝも一椀の恵に預り度かつた。

「お茶などどうです。」

さう言つて男は庭に立つた儘、其處の桶の中に伏せてある飯茶碗を取り出して、其大きな土瓶を自在鍵から外してそれに茶を注いでくれた。

其差出した茶碗を一念はお三千に譲つた。お三千は汚いかまじ框に腰を下ろして両手でそれを受取つた。寝てゐる女が暗い圍爐裏の向うで眼を光らして此方を見てゐることを思ふとい氣持はしなかつたが、今や防ぐことの出来ない渴を醫する爲めに、両手で持つた茶碗を急いで色の褪せた口許に持つて行つた。

茶はぬるかつた。それでもお三千は其大きな一椀の茶を一息に飲み乾した。

「お茶がぬるおすやろな。」

さう言つて男は圍爐裏の中に一握りの黒木を投げ込んだ。火はぱつと燃え上つた。

此小さい小屋の中に様々の貯へのあることが此時お三千の目に映つた。中にも一方の壁

に數限りも無く釣り下げてある澤山の玉蜀黍が目についた。

此山人の食料の重なものが此玉蜀黍であるらしくお三千には思へた。

一念もお三千も思ふ存分其ぬるい茶を飲んだ。

「あんた方お午の御飯がまだどすやろ。冷の御飯がおすさかい、お香子でなとおあがりやすいな。」

女の聲が又圍爐裏の向うから聞えた。其聲は人を牽きつけるやうな優しさを持つてゐた。始めから此女の聲は此山中の小屋に不似合な優しい聲だと思つてゐたが、今の聲はしみじみとお三千の心を和らげた。

「おほきに。」とお三千は丁寧に頭を下げた。

「おあがりやすか何もおへんけど。」

男はお櫃を二人の前に置いて、別に漬物の出し古した鉢を取り出した。

「新らしいのを出しておあげやすや。」と女は聲を掛けた。

「もうかまはんといとおくれやす。そないに構うとくれやすと氣づまりでたべられまへんさかい。」とお三千は男の漬物桶に手をかけたのを強ひて止めた。

「そんならさうしまほ。心配なしにたんとおあがりやす。」

さう言つて男は表に出て行つた。

「そんならよばれますわ。」

三千歳はお櫃を引寄せて御飯をよそつて一念に渡した。最前此山の人の食べてゐるのは玉蜀黍ばかりのやうな心持がしたのであつたが、それは割合に白い麥の飯であつた。

「たんと食べとくれやすや。」と女は又聲を掛けた。

「おほきに。」とお三千は又頭を下げた。

鉢の底に古びて残つてゐる色の悪い澤庵が山海の珍味のやうに思はれた。

二人は全く心にかゝることが無く、極めて静かな落着いた心持で食べた。其間に女とお三千との間にはほつ／＼話が交はされた。

「あなたは京都のお方どすやろな。」

「さうどす。」

「もうこれから仰木越へお出やすのは大變なことどすよつて、それより仰木村の方へお降りやして坂本へお戻りやしたらどうどすいな。」

「そんならさうしまほか。」

「さうおしやす。山道は物騒やさかい、ちつとでも早うお降りやしてお歸りやすやうにおしやす。」

「おほきに。」

「うちの親爺おやぢさんに送つておもらひやす。山道は慣れやはらん人には迷ひやすおすでなあ、

仰木村迄親爺さんに送つておもらひやすいなあ。」

「おほきに。」

お三千と一念は此時飯を含んだ頬をつぼめるやうにして互に顔を見合はせた。二人を駆落者と見て暗に意見するらしい口吻を片腹痛く思はぬでもなかつたが、それでも此女の生れついた優しい聲が何といふことなしに二人の心を牽きつけた。

お三千は女の病氣を聞いた。女はもう永年腰抜けになつて男の厄介になつてゐる果敢ない身の上だと言つた。もと都近く住まつてゐた女かと思つたが、さうでもなかつた。女は初めからの山賤であつた。よく話して見ると別に變つたところのある女でもなかつた。唯生れ乍ら人の心を和らげる優しい聲の持主であつた。

お三千は財布から取り出した札を紙にくるんで圍爐裏の縁に置いた。女はそれを辭退したが、二人はそれを聞きすて、厚く禮を述べて出た。

表には初夏の明るい日が前の如く照り輝いてゐた。振り返つて見る小屋の中は暗かつた。向うの高い峯の雑木を伐り開いた跡に立つて何事をかしてゐる男がはつきり見えた。二人は其方を見上げて頭を下げた。

男が下りて来ようとするのを一念は手をあげて推しとめた。思ひとまつたらしい男に二人は慇懃に頭を下げて例の谷川沿ひに麓に出ることゝした。

二人は暫く黙つてゐた。

「あないな時に心中するものどすやろか。」
やがてお三千の方から口を切つた。

「どうだか。」と一念は苦笑した。其時の自分を振り返つて見ても到底死ねさうには思へなかつた。

同じ心持がお三千にもあつた。

前の壊れた炭竈のあたりは無造作に通り返した。

大變登つたやうに思つたのであつたが、下つて見るとそれ程でもないことが判つた。

二人は共に物足りない心持を抱いていつかもう仰木村に降りてゐた。

この村にも數臺の車があつた。其うちの二臺が二人を坂本迄運んだ。

自動車は坂本からの電話で又飛ぶやうに逢坂山を越えて先の茶屋迄來た。

「こないな事も珍らしうおしたなあ。」

お三千は茶屋で一念に別れる時に斯う言つた。單調な戀に倦み疲れたやうな心持が此頃
はいつもお三千の心の底にあつた。

同じやうな心持が一念にも萌しかけてゐた。(完)

阪東君、僕はもうこれで筆を擱かうと思ふ。三千歳の子供はもう七つになつてをる。京の四季に出て来る寺の下に今でも住んでゐることは前に言つた通りである。彼女の生活が其後も今迄と大同小異であることは大抵君にも想像のつくことと思ふ。

一念は此頃大分重用されて、時々は恵心廟などを一人で留守してゐることなどもある。彼の部屋を覗いて見ると東京から出る新らしい思想を鼓吹した雑誌などがあることもある。其辭衣の袖をかき合はせて澄まし込んでゐるところを見ると大分坊主らしくなつて來た。外見許りでなく人に話す言葉を聞いても月並の坊主臭いところが出來て來たやうである。

戀に倦んだ心は固より三千歳に多からうが、一念も此頃は同じやうに見える。彼等二人は自ら熱することを求めて得られないことをもどかしがつてゐるやうにも見える。けれども一旦どうかした機會があつたらいつ又非常な力で爆發しないとも言へない。二人は休火山のやうな静かさで叡山の上と東山の麓とに住つてゐる。

彼等の後々日譚を書く時が又來るかも知れぬ。もう來ないかも知れぬ。唯此處には鴨川の水が僕に唾いたところのものを倉卒に書き綴つた迄である。君が讀んでしまへばもう他に用は無い。早速送り返してくれたまへ。鳥邊山へでも持つて行つて焼きすてゝしまはう。

大正十年六月七日印刷
大正十年六月十日發行

風流懺法
不許複製

發行所

著作者

高濱

定價貳圓

發行者

東京市麴町區元園町一丁目十九番地
下山儀三郎

印刷者

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
鷺見九市

印刷所

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍

東京市麴町區元園町一丁目十九番地

中央出版協會

電話九段八四一
振替口座東京二八三八一



